
仮面ライダーオーズ 街を守る王の戦士

雪羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーオーズ 街を守る王の戦士

【Nコード】

N3169Y

【作者名】

雪羅

【あらすじ】

この作品は仮面ライダーオーズとなって戦う少年の物語です。コラボ、要望はなるべく受け付けます。更新は不定期ですが一ヶ月に2話くらいは必ず更新します。初めての作品ですので至らぬ部分もありますが暖かく見守ってください。12/2ベルトさん作「仮面ライダーエターナル風都を守る永遠の戦士」の進也君と里美ちゃんが登場します。

第01話「出会い」(前書き)

最初は簡単な出会いとかです。ごゆっくりどうぞ。

第01話「出会い」

ここは日本の京都。春の訪れた京都は桜が満開でとても美しい。

【如月家】

「何！？本当ですか母さん」

そう言った少女、如月志野は携帯電話で母親と通話していた。

「本当よ。昔の友達の息子さん。ご両親を亡くしているからうちに居候させることにしたのよ」

「名前は？」

電話の奥で母親の笑い声が聞こえた。

「神代達也君。志野にお似合いの男の子よ」

「な、何を言ってるんですか母さん！！！」

その言葉に僅かに頬を赤くして声を荒げた。

【京都駅】

「それじゃあ行くわよ達也君」

「はい、これからよろしく願います」

礼儀正しく挨拶をした少年、神代達也はこれから住むことになる如月家へ向かう。

【如月家】

「さ、ここよ。これからは私を本当のお母さんと思ってくれていいからね」

「ありがとうございます」

家の玄関の扉を開き、家の中へと入った。純和風の家は、落ち着きのある雰囲気醸し出しており、これから住むには最適な場所だ。

「あ…」

キッチンのあるリビングは畳に座布団と本当に和で統一してある。

そこに座る少女。

「お前が神代達也か」

「あ、ああ」

その少女は如月志野。髪は黒のポニーテールで纏めてあり、顔立ちも相まって鋭さが溢れている。可愛いより綺麗、のほうが褒め言葉としては似合う。

「私は如月志野だ。これからよろしく頼む」

「俺は神代達也。これからよろしく」

「もう志野、そんな怖い顔しないで嬉しいなら我慢しなくても良いのよ」

その言葉に対し志野は。

「我慢していません。この顔は産まれたときからです」

「達也君、私の自己紹介がまだだったわね。如月欄香。改めてよろしくね」

「はい、よろしくお願いします」

この如月家での生活が始まった。欄香は一人小声で呟いた。

「この街も守ってくれるかしら」

「仮面ライダーオーズ」

第01話「出会い」（後書き）

次は達也が戦います。戦闘描写はあまり得意ではありません。

登場人物設定（前書き）

登場人物一覧です。投稿時点でまだ登場していないキャラがいますが、「こんなキャラもいるんだな。」位の認識でお願いします。1
1／13 ネタバレ若干ありますので嫌な方は気をつけて。12／2
6 ゲストの進也と里美の本作品での設定を追加しました。

登場人物設定

登場人物設定

神代達也 かみしろ たつや

風都学園高等部新1年生

体重 59? 得意科目 日本史、英語

身長 171? 苦手科目 数学、生物

髪型 黒い短髪

一人称 俺

本作品主人公。中学三年の時に両親を事故で亡くす。両親の知り合いの如月欄香（下記）の家に居候することになる。仮面ライダーオーズに変身できるが理由は不明。

普段は怒ることの無い優しい性格だが大切な人などを貶された時は怒りが露わになる。

見た目はI S インフィニットストラトスの織斑一夏。みんなに優しい美少年。声のイメージは当然一夏役の内山さん。

如月志野 かき しの

京都鳳凰学園高等部新1年生

得意科目 数

学、物理

体重 教えるわけないだろうが馬鹿者！ 苦手科目

古典、世界史

身長 163cm

髪型 黒髪でポニーテールを二つに分けた感じ

一人称 私

生まれつき家事は万能。父親は剣道の有名な流派の継承者。東京にて道場を開いている。親の影響で剣道を嗜んでいる。

自らの発育の良すぎる体（特に胸）に若干の悩みを持って

いる。しかし、それで達也の気を引けるなら、とも思っている。第09話でファンガイアの王の血を受け継いでいることが発覚。仮面ライダーキバになる。

見た目はI S インフィニットストラトスの篠ノ之箒。かなり強気な性格な美少女。声のイメージは箒役の日笠さん。

たっかわ しんじ
龍川信司

京都鳳凰学園高等部1年生

得意科目 体育、美術

体重 60 kg

苦手科目 英語R、現

代文

身長 168 cm

第04話から登場。達也に次ぐ第2の仮面ライダー。仮面ライダー龍騎に変身する。原作と違い、鏡が無くても変身可能、契約モンスター絡みの厄介事も無い。達也達が通う京都鳳凰学園高等部に転入してきた。達也とはうまく意気投合しており、今後に期待が持てる。

見た目は機動戦士ガンダムOO1stの刹那・F・セイエイ。明るくて楽しい。声のイメージは刹那役の宮野さん。

きさらぎ らんか
如月欄香

志野の母親。夫は東京で剣道の師範を務めているため、現在は志野と二人暮らし。志野の成長を見守りながら、日々穏やかに過ごしている。

見た目は機動戦士ガンダムOO2ndのスメラギ・李・ノリエガ。

しのはら あや
篠原綾

得意科目 英語、世界史

苦手科目 数学、化学

第03話より登場。京都鳳凰学園高等部1年生。達也達と意気投合し、いつも会話している。転入してきた信司の事を何かと気にかけており、恐らく好意を持っていると思われる。一人称は僕。

第13話にてカブトゼクターに選ばれて仮面ライダーカブトになる。

見た目はISインフィニットストラトスのシャルロット・デュノア。素直で男心を打ち抜く狙撃者スナイパー（笑）。

上野進也うえのしんや

第12話より登場。ベルトさん作「仮面ライダーエターナル」風都を守る永遠の戦士」からのゲスト。

風都に蔓延はびこっていた財団Xを全滅させ、その残党を追って京都へやって来た。

原作とは違い、変身するメモリはTXではなくT2ガイアメモリを使う。いわゆるパラレル設定。京都では里美（下記）とその祖母と暮らしている。

モデルは「W」の大道克巳。

まつしたさとみ
松下里美

第12話より進也と一緒に登場。ベルトさん作「仮面ライダーエターナル」風都を守る永遠の戦士」からのゲスト。

進也の付き添いで京都へやって来た。原作とは違い仮面ライダーイクサに変身する。本人は戦いをあまり好まず、変身することは少ない。

モデルは「ディケイド」の光夏海。

登場人物設定（後書き）

次から戦います。

第02話「始まる戦い」(前書き)

いよいよ達也が戦います。所有メダルは次話から話しの冒頭に掲載します。

第02話「始まる戦い」

「志野、準備はできた？」

「はい、万事OKです。」

「如月さん、行こう。」

「二人とも、気をつけるのよ」

達也、志野「行ってきましたーす」

二人は京都鳳凰学園高等部の入学式に向かっていた。

「如月さんは何か部活をする予定はあるの？」

「剣道部があれば入部するつもりでいる」

「剣道、得意なの？」

「父親の影響でな。いま父親は東京で道場を開いている」

そんな話を話している内に学園についた。受付にて、

「ご入学おめでとうございます。お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「神代達也です」

「如月志野です」

名前を伝え、所属クラスを教えてもらい、リボンを制服の胸に付けられた。

二人は同じ1年D組の生徒になった。クラスには、他の生徒がいた。

「みんな席に着いてー。」

担任の先生と思わしき人が入ってきた。若い女の先生だった。

「私が今日から皆さんの担任になりました、若月美奈です。一年間よろしくね」

若月先生が自己紹介を終えると、

「それでは、入学式が始まりますので、皆さん出席番号順に並んでください」

場所は変わって入学式会場。いろいろなかやった後に、ここの

理事長の挨拶が始まった。

「新入生の皆さん、入学おめでとう！そしてここ京都鳳凰学園高等部にようこそ！この学園の生徒という新しい君たちの誕生だ！！ハッピーバースデー！！！！！！」

延々と理事長の祝辞が続き、ようやく入学式が終わった。

場所は再び1年D組。

「それでは、皆さんに自己紹介をしてもらいます。では、出席番号1番…」

突如校庭から爆音が響いた。何かが激突した。

「み、み、み、み、皆さん落ち着いて…」

先生が一番落ち着いていなかった。やるしかないのかよ…。

「ちよっ、君！？」

教室を飛び出して俺は爆心地に走っていった…。

「おうおう、こんなめでたい日に来るやつがいるのかよ。まったく、入学早々これかよ」

オーズドライバーを腰にかざし、自動的にベルトと共に腰に装着される。手には3枚のコアメダルがあった。3枚をドライバーに装填し、右腰のオースキャナーでメダルの装填部分をスキャンする。

「変身！」

『タカ、トラ、バッタ！タトバ、タトバタトバ！』

達也は仮面ライダーオーズタトバコンボに変身した。

「神代…？」

志野は目の前の出来事に唖然としていた。

「貴様、何者だ？」

煙の晴れない爆心地からその声は聞こえてきた。達也は手首を捻りながら、

「オーズ。仮面ライダーオーズ」

爆風の中から、一体の怪物が姿を現した。見た目はライオンみた

いだ。

「さしずめライオンヤミーって所か。行くぜ」

オーズは腕のトラクローを展開させ、ライオンヤミーに斬りかかった。敵も爪で応戦してきた。しかし、こちらの方がリーチが長いため、トラクローが一方的に当たった。

「うおおおおおおお！」

ライオンヤミーは頭から強烈な熱光線をオーズに向けて発射した。「熱ちちちちち、やってらんないよ全く！」

オーズはメダルを三枚全部取り替えて、セットしてスキャンした。

『サイ、ゴリラ、ゾウ！サゴーズ！サゴーズオ！』

オーズはサゴーズコンボへコンボチェンジをした。

「これでも喰らえ！」

オーズは腕のゴリバゴーンを、相手に向けて発射した。

「うがああああああ！」

見事に命中した。

「とどめだ！」

オーズはスキャンで再びメダルをスキャンした。

『スキャンニングチャージ！』

オーズは両足をくっつけてジャンプし、そのまま降りて、地面に着地した。するとライオンヤミーは

身動きがとれずにオーズの方へ引き寄せられていく。

「せいやあああああ！」

エネルギーの蓄積されたゴリバゴーンで両側からライオンヤミーは叩き潰され、大量のセルメダルと
なって爆散した。

「ふう、おしまいっ」と

他の生徒達は達也をみて、

「凄いな、あんな化け物を倒すなんて…」

「神代…、お前は一体…」

【???】

「カザリ、お前のヤミー、あっけなく倒されたじゃないか」

「しかたないでしょ。あのオーズが相手だったから」

「ま、次は負ける気はしないけど」

「あいにくだが、次は俺と俺のヤミーの順番だ」

「ほう。その実力、みせてもらおうか。アंक」

「望むところだ、ウヴァ」

【如月家】

「神代、お前は…」

「隠しててゴメン。俺は仮面ライダーオーズなんだ」

そういつて達也は志野の部屋を後にした。

残された志野は…。

「なんだ、この気持ち…。あいつの事が、頭から離れない…」

「ズバリ、恋よ」

「母さん!？」

欄香がゆっくりと部屋に入ってきた。

「志野、貴方は、達也君に恋をしたのよ…」

「……………」

「まあ、そう恥ずかしがる事じゃないわよ。志野の年頃ならおかしくない。応援したげるから頑張ってね」

「ありがとう…」

志野は頬を赤くしながらつぶやいた。

「あいつの事が……………」

物語の歯車がゆっくりと動き出した…。

第02話「始まる戦い」(後書き)

戦闘シーンって難しいですね。次話でまた会いましょう。

【次回予告】

「久しぶり達也君」

「メダル返せえ!!」

「神々しい…」

街を守れ! 仮面ライダー!!!

第03話「紅く煌めく不死鳥」(前書き)

第03話です。どうぞ。

第03話「紅く煌めく不死鳥」

t h e m e d a l s

c o u n t s

現在、オーズの使

えるメダルは…？

タカ×1

トラ×1

バッタ×1

クワガタ

×1 ライオン×2

サイ×1

ゴリラ×1

ゾウ×1

「それでは、入学式に行えなかった自己紹介をしてもらいまーす」
(そういえば先生、そんなことも言ってたな…。内容決めてねーぞ。一体どうすればいいんだ？ええつとまず…)

「はい、次は、神代君、神代達也君」

「ええつ、もう俺え！？」

志野（お前が惚けているからだ馬鹿者…。）

「えーと…、神代達也です。特技は運動全般、趣味はこれといったものはありません…。これから1年間よろしく願います」

クラス中の女子が少々頬を赤くしていた。変な事でも言ったかなあ？

「はい、神代君これからよろしくね。では次は、如月さん、よろしく願います」

志野は「はい」と返事をして教壇に立った。

「如月志野だ。特技は剣道、趣味は料理。同じクラスの学友としてこれから1年間よろしく頼む」

なんだ！なんだ！クラス中の男子がにやけているぞ！か、神代、お前もかああああ！覚悟しておけ…！！後でお前を…！！

(なんだ！なんだ！如月さんが俺をにらみつけているぞ。怖い怖い！)

授業やら何やらで3時間後：時計は12時45分を指していた。

「そろそろ食事の時間だな。如月さん、食堂に行こ」

「もうそんな時間か、よし、行くとしよう」

ここ京都鳳凰学園高等部の食堂は食券発行機に電子生徒手帳をかざして認証をして自分の食べたいメニューを選ぶ、というシステムだ。

「えーと、よし。これにしよう」

俺はざるうどんにした。一方志野は…。

「私はこれだな」

志野もざるうどんを選んだ。

「お、如月さんもざるうどんなんだ」

「悪いか：／＼」

（如月さん、なんで頬が赤いんだ？）

「ここにしよう。眺めもいいし」

食堂は校舎2階に設置されている。席について俺たちは食事を始めた。そこへ…。

「あれ、達也君？達也君だよ。僕、覚えてる？篠原綾。小学校の時の…」

「綾！？何年ぶりだろう？ずいぶんと可愛くなったな」

「へっ！？ちよっ、達也君、何言ってるの／＼！？」

（何なんだ…彼女は…）

「あ、ごめん如月さん。紹介するよ。篠原綾。俺の小学校時代の同級生。綾、彼女は如月志野さん。今俺が居候している家の娘さん」

「どうも。如月さん、これからよろしくね。私は篠原綾。綾って呼んでくれればいいから」

「こちらこそ。私は如月志野。志野とでも呼んでくれ」

（良かった、二人とも仲良くなったみたいだ）

二人から三人になった俺たちは色々話しながら食事を終えた。

P M 3 : 3 0

「それでは皆さん、明日から本格的に授業が始まりますので忘れ物

に突き立てた。タカヘッドの眼が赤く光り、タカの鳴き声が轟いた。
「グアッ！き、貴様あ！ガッ！」

オーズはアंकの体から二枚のメダルを抜き取った。

（これは、クジャクと、コンドルかな？）

「クソッ、相手がガキだと思って油断した！ヤミー！取り返せ！」
「遅い！」

『タカ、クジャク、コンドル！タ〜ジャ〜ド〜ル〜！』

オーズはタジャドルコンボへとコンボチェンジを完了した。その姿はまるで不死鳥の如く紅く煌めいていた。

「ちっ、しくじったな。俺は逃げるか…」

「神々しい…」

アंकは苦しみながらも飛んで逃げていった…。

「メダル、返せ！」

クジャクヤミーは翼で攻撃を仕掛けてきた。しかし、オーズには効いていなかった。逆にオーズのコンドルレッグのクローをもろに喰らってしまった。飛び散るセルメダル。

「終わりだ！」

オーズはスキヤナーをドライバーに滑らせた。

『スキヤニングチャージ！』

オーズは上昇してクジャクヤミーにプロミネンスドロップを喰らわせた。爆散し、セルメダルとなって消えた。

「如月さん、大丈夫？」

「神代、私は無事だ。綾は無事に家に帰っていった」

「ふーっ、良かった」

「一つお願いがある。い、今からお互いを下の名前でよばないか？」
志野は少しもじもじしながら呟いた。

「OK。じゃ、綾も無事に家に帰っていったし、俺たちも帰ろうか。志野」

「ああ、帰るとしよう、達也！」

二人はまた一段階強い絆を手に入れた。

【???】

「アंकらしくないね。コアを二枚も奪われるなんて」

「ガキがオーズだったから油断した。次はこそは…」

「じゃあ、次は俺がやる」

「あらあ、ガメル自分から言うなんて偉いわ」

「ゲヘヘ、ありがとうメズール」

カザリ（力と防御が取り柄のガメルか…。なんだか面白い事になり
そうだね…）

【如月家】

「あら、志野、何か吹っ切れたの？」

「ああ！」

欄香は嬉しそうな笑顔を浮かべる志野を優しく見つめていた。

第03話「紅く煌めく不死鳥」(後書き)

今回は登場人物設定にも掲載してある新しいライダーが登場します。

【次回予告】

「桜が綺麗だな…」

「これを受け取って欲しい…／＼」

「f a i n a l v e n t」

戦わなければ生き残れない!!

第04話「桜のもとで舞う龍」(前書き)

第二のライダーが登場します。どうぞ。

第04話「桜のもとで舞う龍」

C o n t s t h e m e d

a l s 現在、オーズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 コンドル×1 クワガタ×

1 バッタ×1

ライオン×2 トラ×1 サイ×1 ゴリラ×1

ゾウ×1

5月15日。あれから一ヶ月以上過ぎたのか…。そういえば今日は日曜日。高校も休みだ。俺は特にやることもなく、ぼけーと部屋で過ごしていた。すると…。

「おい達也君ー。ちよつと来てー」

欄香が達也を呼んだ。いったい何の用だろう？俺は欄香さんの部屋に行った。

「達也君、志野がね、貴方と一緒に外出したいと言ったの。あの子、自分で言うのは恥ずかしいから私にたのんで来たの。ま、あの子の為だから、行ってあげて。もう玄関で待っているから」

「了解です」

俺は身支度を調べ、玄関へ向かった。

玄関では志野が少々怒り気味だった。

「遅いぞ達也！女性を待たせるとは何事だ！」

「ゴメン、身支度に手間取ったから…」

「今回は許してやる。しかし、次遅れたら…覚悟しておけよ」

俺は怒っている志野に謝りながらサンダルを履いて出発した。

日曜の京都は観光客がやはり多い。まあ、歴史ある街だからな…。やっぱ京都の桜は綺麗だな…。心がなんて言うか、あーっ、なんて表現したらいいか解らん！

「おい達也、どうした？どこか調子でも悪いのか？」

志野が俺を心配してくれてたのか、俺に話しかけてきた。

「いや、桜が綺麗だな、って思ってた」

「そうか」

しばらく色々な観光スポットを周り…。

「よし、あそこの店で何か食べるとしよう」

二人は風情のある定食屋に入った。

「いらっしやいませー。お二人様ですか？」

店員が愛想良く訪ねてきた。俺達は「2名です」と伝え、店員は俺達を座敷へと案内してくれた。

「風情がある店だな」

「ああ、畳に直接座って食べるのも中々粋なもんだな。で、志野は何を注文しようと考えてるんだ？」

「私は…そうだな…、よし、この鮭の塩焼き定食にしよう」

「俺は…、この若鶏の唐揚げ定食にしよう」

志野が近くを通りかかった店員さん呼び止め、注文を始めた。
「では、ご注文を確認させて頂きます。鮭の塩焼き定食がお一つ、若鶏の唐揚げ定食がお一つ、以上でよろしいでしょうか？」

「はい」

「ではしばらくお待ちください」

6分後、二人の料理が届いた。

「では達也、食べるとしよう」

「OK」

二人「いただきます」

志野は鮭を食べた。

「良い…良い物だな…」

志野は目がキラキラしていた。俺はそんな志野と楽しく会話しながらご飯を食べた。

すっかりお腹いっぱいになった俺達は勘定を済ませに行った。

「お客様の会計2650円になります」

俺は度肝を抜かれた。なんとか財布の中に3000円あって事な

きを得たが…。

帰り道で志野が、

「達也。すまなかったな、ご馳走になって」

「別に気にしなくて良いよ。男が女の子に奢ってもらうなんて…」

「その、今回のお礼がしたいのだが…」

志野と達也は近くにあったベンチに座り、話を続けた。ベンチでの二人の間の距離は5cm

と無かった。思わず動揺する達也。

「これを受け取って欲しい…／／／」

志野の唇が達也の唇に近づいてきた。

（え！？もしかしてこれって…キス！？）

達也が慌てていると路地の奥から唸り声が聞こえてきた。思わずその方向を向く達也。

「ごめん志野、そこで待っていてくれ！」

達也は走っていった。その後、志野が呟いた。

「私としたことが…なんて大胆な…／／／」

志野は自分の行いに気付き、顔を真っ赤にしていた。

達也は現場に到着した。そこでは警官がすでに拳銃で攻撃を始めていた。相手の容姿は…ゴリラ？とにかく倒すしかない！

「お巡りさん下がって！ここは俺が！」

「待て、君に何が…」

「変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タトバッ！タトバタトバ！』

タトバコンボに変身しヤミーに拳をぶつける。しかし、無に等しいほどダメージは少なかった。

「堅てえ…。ならコイツだな」

オーズは真ん中のメダルを取り替えて再度スキャンした。

『タカ・ゴリラ・バッタ！』

タカゴリバにフォームチェンジをした。ゴリラアームだからか、トラアームよりかはダメージは大きい。しかし…。

「ハッ！」

相手の一撃を直に受けてしまい、変身が解除されてしまった。

「くそお…」

さらにそこへ予想外のアクシデントが訪れた。

「達也！」

「馬鹿っ、志野！待ってろと言ったろ！」

それを好機とみたゴリラヤミーが志野に襲いかかった。

「え…？」

あまりの事態に足が動かない志野。

「まずい、逃げろ志野…！」

ヤミーの拳が志野に当たろうとした刹那、

『STRIKE VENT』

謎の機械音が響いた。突如火炎弾がヤミーを直撃した。吹っ飛ぶヤミー。

「君、ここに来ちゃ危ないでしょ。ほら、下がって」

「お前は一体…？」

達也が問いかけた。

「俺の名は仮面ライダー龍騎。ま、君達の味方だ。お二人さん、下がってよ！」

そう言うた龍騎はバックルのカードデッキと呼ばれる所から1枚のカードを取り出して左腕のドラグバイザーに装填した。

『FINAL VENT』

すると龍騎の背後から契約モンスターのドラグレッターが姿を現した。ジャンプし、ドラグレッターと共に必殺技「ドラゴンライダーキック」をゴリラヤミーに命中させた。ゴリラヤミーはセルメダル1枚を残して爆発した。

「ありがとな。おかげで彼女を守れたよ」

龍騎は変身を解除した。

「俺の名前は龍川信司。また会おうな」

そう言い残し、信司は去っていった。

翌日…。

今日は達也が風邪で休んでいる。

（一人は寂しいな…。）

なんて考えてる間に先生が教室に入って来た。

「今日からこのクラスに新しい仲間が加わります」

教室のドアが開き、一人の男子生徒が入ってきた。

「まさか、あいつ…」

その男子生徒は口を開いた…。

「龍川信司です。今日からこのクラスに所属することになりました。みなさん、よろしくお願いします」

まさかあいつに転校生として再会するなんて私は予想してなかった。

【???】

「くそー、俺のヤミー倒されちゃったよお」

「まあ、予想外の乱入者が来たんだから」

「ちっ、結局俺達はコアを取られ損かよ」

少女が一人立ち上がった。

「次は私が行くわ…」

「面白い、やってみろ、メズール」

「言われなくても」

また新しい敵が迫っていた…。

第04話「桜のもとで舞う龍」(後書き)

どうでしたか？次回は前後編構成にしています。

【次回予告】

「何でお前がここにいる…」

(嘘だろ…こんな時に…！)

街を守れ、仮面ライダー！

第05話「風邪と海のコンボ」前編（前書き）

第05話です。ごゆっくり。

第05話「風邪と海のコンボ」前編

C o u n t s t h e m e d a l s 現在
オーズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 コンドル×1 クワガタ×1 バッタ×
1 ライオン×2

トラ×1 チーター×1 サイ×1 ゴリラ×1 ゾ
ウ×1

「やあ昨日の…」

少年龍川信司はそうつぶやいた。

「お前、何故ここにいる…」

志野が信司に話しかけた。

「何故って…。ここに転入してきたからでしょ」

「たしかにそうだが…」

「志野、そこまで」

「綾…」

志野を止めたのは篠原綾。志野のこの学校唯一の女友達だ。

「ここにくる前に彼と知り合ったらしいけど何故ここにいての
は…？」

「む、お前が言うなら…」

「それに、志野には達也君がいるじゃない」

その言葉に志野は顔を真っ赤にする。

「ば、馬鹿者／＼／＼／＼！」

「そういえば、達也君は？」

「あ、あいつは風邪で休んでいる。」

「え、そうなの？」

「ああ、あいつ昨日散歩していたら足を滑らせて川に落っこちたら
しい」

綾・信司「……………」

啞然としていた。まさかそんな何とも間抜けな理由で風邪を拗こじらすなんて。

「お見舞い、行こうか？」

「いや、本人が必要無い、と言っていた。だから必要無い」

「ま、確かに愛しの志野に看病してもらった方が彼も嬉しいでしょうね」

その瞬間、綾の頭に信司の軽いデコピンがHITしていた。

「そんな事あんま言ってやんなって。志野が可哀想だろ」

綾は何故か頬が軽く赤に染まっていた。

そして下校時間。志野は一人自宅へと歩いていった。

（達也の奴、大丈夫だろうか。まあ母さんがいるから万事問題ないとは思うが…。）

志野の足が止まった。目の前にタコを模した怪物がいた。全力で逃げる志野。

（ちょ、嘘だろ！？こんな時に襲われるなんて…！）

その時、

「志野！」

風邪で寝込んでいるはずの達也がいた。

「達也！風邪は大丈夫なのか！？」

「お前が心配で見に来たらこの有様だ。下がってろ。変身！」

『タカ・トラ・バツタ！タトバツ！タトバタトバ！』

「うおりゃ…って視界が…！」

やはり風邪をひいてる今の達也にオーズへの変身は無理がありすぎた。瞬く間にタコヤミーにボコボコにされる。あっという間に変身が解除されてしまった。さらに…。

「やべえ、メダルが…」

ヤミーにサイとライオンのメダルを奪われてしまった。

「残りのメダルも頂くぞ…」

そこへ。

「達也、大丈夫か！？」

信司が駆けつけた。

「お前、何故俺の名前を…？」

「話は後。下がってろ」

そう言って達也を下がらせた。信司はカードデッキを構えた。すると腰にバックルが自動的に現れた。

「変身！」

本来の龍騎と同じ変身ポーズをとってカードデッキをバックルに入れた。本来ならば、龍騎達は鏡などの前でないと変身ができなかったが今作品は別だ。

「いきなり行くぜ！」

龍騎はデッキケースからカードを一枚取り出し、ドラグバイザーに入れた。

『S W O R D V E N T』

空からドラグレッターの尻尾を象った剣が現れ、龍騎の手に収まった。

「うりゃあ！」

龍騎の放った一撃はヤミーの体に当たる事も無かった。

「また来るぜ」

そう言い残しヤミーは去っていった。

「ゴメン達也。コア、取り返せなかったよ…」

「いいって。助けてくれただけでも有り難いよ」

「じゃ、俺は帰るよ」

「またな」

信司は走っていった。

「私たちも帰るか…」

「そうするか…ゲホッ、ゴホッ」

「無茶のしすぎだ」

【???】

「はいガメル、カザリ。貴方のコアよ」

「うわぁーありがとうメズール」

ガメルはメダルを体に吸収させた。すると何も無かった腕に重量感のある鎧みたいな物が現れた。

「やるじゃん。君のヤミー」

「まだまだ本番はこれからよ。まだ策があるから…」

その策とは一体なんなのだろうか…。

第05話「風邪と海のコンボ」前編（後書き）

次回は達也が新しいコンボを……。こうご期待。

【次回予告】

「よし、志野、どっか行こうぜ！」

「お楽しみ中悪いけど、貴方のコアを頂くわ」

『シャチ！ウナギ！タコ！』

華麗に舞え、オーズ！

第06話「風邪と海のコンボ」後編（前書き）

第06話です。ごゆっくり。

第06話「風邪と海のコンボ」後編

C o u t s t h e m e d a l s 現在オーズの
使えるメダルは…?

タカ×1 クジャク×1 コンドル×1 クワガタ×1 バ
ッタ×1

ライオン×1 トラ×1 チーター×1 ゴリラ×1

【志野の部屋】

「くそっ…コアを2枚も盗られた…。ゴホッ…、ゲホッ…」

「大丈夫か…？ だけどメダルを全部盗られるよりはまだいい方だろ」
「たしかにそうだが」

志野と達也が話している所に欄香が入ってきた。

「はい、薬と水。これ飲んでゆっくり休みなさい」

「ありがとうございます…」

欄香はニツコリと笑顔を浮かべて部屋を出て行った。

【???】

「そろそろね…」

「君のヤミーが完全に？」

「ええ。巢の中でそろそろ…。その時は貴方達にもセルを渡すわ」

「メズール、俺にもくれるの？」

「ええ、ガメル、貴方にも沢山あげるわよ」

「わーい。ありがとうございます」

「なんか…、あの二人は800年前と何ら変わらないな…」

「ああ…。自分で言うのも何だが俺達は多少変わったのによ…」

二人のやりとりをアंक、カザリ、ウヴァは呆れた様子で見
て…。

二日後…。

「よーしっ、風邪も治ったし、久々にどっか行こうぜ」

志野は少し困惑していた…。

（た、達也の奴、わ、私をデートに誘うつもりなのか…／＼？よ、よし！）

「い、いいだろう。その代わり、行き先は私に決めさせてくれ…」

「どこに行きたいんだ？」

「神戸に行きたい…」

「いいぜ、じゃあ準備して玄関で。」

10分後…。

「よし、行こうぜ」

「お、おう」

俺達は電車に乗って神戸まで行った。

「ここが神戸かぁ…！！」

「海の風が気持ちいいな…」

志野ははしゃいでいた。ま、俺が風邪の間、ずっと看病してくれたからな。これくらいは当然かな？

「なあ志野、中華街に行かないか？」

「うむ！！行こう行こう！！」

神戸中華街。色んな中華料理がそろっている。

「なあなあ、これ食べよう！！」

「お、おう…」

志野が注目した物は肉まんだった。俺は実を言うと食べたことが…。

「らっしゃい！」

店の店主が景気よく声を出した。

「志野、何個食う？」

「とりあえず10個お願いしまーす」

「あいよ！全部で1200円ね！」

俺は財布から1200円を支払った。うう…。この間定食屋で払ったから財布の中が…。（涙）

海に見える場所のベンチで俺達は座った。

「綺麗な海だなー！」

なんか志野の口調が変わっている。志野は笑顔で肉まんを頬張った。相当好きなんだな…。そんなに美味しいのか…？

「達也、一つやろう！」

「お、おう、ありがとう…」

俺は志野から肉まんを受け取り口にいれた…。

「おっ、美味い！これが肉まんか…」

「初めてなのか…。そうなら尚更美味しく感じるだろうな！」

その安らぎの空間を切り裂く声が響いた。

「お楽しみの所悪いけど、貴方のコアメダル全て頂くわ」

「だ、誰だ！？」

すると目の前の海から巨大な鯨の怪物とそれを従えてる一体の…恐らくそいつを創った奴が現れた。

「お前は？」

「初めてだったわね。私はメズール。グリードの一人よ」

「こないだのあいともまさか…！」

「ええ。私のヤミーよ。」

「貴方のコアメダルを全て頂くわ」

「下がってる志野！変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タトバッ！タトバタトバ！』

メズールは巨大化したタコヤミーと共にオーズに襲いかかってきた。

「ちよっ、待てっ！二対一は無いだろっ！」

「お黙り」

メズールは俺に水を発射した。その勢いは凄まじかった。

「水にはコイツ！」

オーズはヘッドのコアを取り替えてスキャンした。

『ライオン・トラ・バッタ！』

ラトラバにフォームチェンジした。オーズは頭部に力を込めた。

「てや——っ!!」

ライオンヘッドから強烈な熱をもった熱光線が放たれた。

「な、何なの……!!」

「今だ……!!……!!」

オーズはトラクローを展開、力の限りメズールに突き立てた。

「しまった……!!うぐっ……!!」

メズールに相当なダメージを与えられたようだ。それに伴い彼女の体からコアメダルが4枚も排出された。オーズはそれを見逃さずに奪い取った。

「く……!まさか……!」

「ああ。コイツは貰っていく」

メズールはよろけながらも海へ潜って逃げた。

「これはもしかして……!!」

オーズはメダルを全て取り出し、奪ったばかりの青いコアメダルを装填し、スキャンした。

『シャチ・ウナギ・タコ! シャシャシャウタ! シャシャシャウタ
!』

オーズは水棲系メダルのコンボ、シャウタコンボになった。

「よし、これなら!!」

体を液化化させることができるシャウタコンボ。その力で水中に潜む巨大なタコヤミーに挑んだ。タコヤミーは墨爆弾を発射した。しかし、オーズには効かず、あっけなく打ち破られてしまった。

「今度はこっちの番だ!!」

腕に備え付けられているムチを相手に絡め、水中から引っ張り出した。地面に激突し、悶え苦しむヤミー。

「さあてこいつで決めるぜ!!」

オースキャナーで再びメダルをスキャンした。

『スキヤニングチャージ!!』

オーズはジャンプして上空からムチで相手を拘束して引き寄せ、タコレッグの八本足を回転させ、ドリルを作り出し、相手に突き刺してとどめを刺すオクトバニッシュを発動した。

「セイヤアーーーーー!」

見事に直撃し、ヤミーの体を貫いた。セルメダルがあたりに散らばった。

「ふう、お待たせ」

「お、お見事…」

【???】

「ぐっ! ううっ…」

「だ、大丈夫メズール!!」

「コ、コアを4枚も盗られたわ…」

「お、俺のコア、メズールにあげるよ…」

「ありがとう…、でもそのコアは貴方のよ。その気持ちだけで嬉しいわ…」

「おいおい、大丈夫か？」

メズールは「気にしないで」と言い残し人間態に戻り、ベッドに横になった。

「次は俺だな…」

ウヴァが不適に笑みを浮かべた…。

第06話「風邪と海のコンボ」後編（後書き）

次は達也の体にあれが…。

【次回予告】

「ば、馬鹿者…／＼」

「ぐっ…何だ…？」

「そいつの体で何かが起こってるのかもな…」

街を守れ、仮面ライダー！

第07話「知られざるメダルとコンボ」前編（前書き）

第07話です。もう少しで一段落つきます。応援よろしく願います。

第07話「知られざるメダルとコンボ」前編

【?..?】

「ねえ、このメダルなあに?」

ガメルが興味深そうに見つめる。

「これは800年前には使われなかったメダルです」

そう言って黒服の男性は10枚の紫のコアメダルから1枚を抜き取った。その瞬間男性が抜き取ったコアと別の4枚のメダルがどこかへと飛んでいった。残った5枚はその男性の体の中に入り込んだ。「本当に良かったの?自分がグリードになるって」

「終わりを迎える事でこの世界を完結させる私の理想の為です」

「ま、気をつけなよ。Dr真木」

counts the medals 現在オーズの使えるメダルは…?

タカ×1 クジャク×1 コンドル×1 クワガタ×1 バッタ

×1 ライオン×1

トラ×1 チーター×1 ゴリラ×1 シャチ×1 ウナギ

×1 タコ×2

6月上旬は梅雨入りの時期。達也達の暮らす京都にも梅雨が訪れた…。

「あづい~~~~~~~~」

「達也…、黙ってる…。余計に暑い…」

京都は気温32度を計測していた。二人は部屋で扇風機の風邪を浴びながら会話していた。

「志野、達也君、買い物に行ってきた」

二人は欄香に頼まれるがままに買い物に行った。

「全く、何でもこんな暑苦しい日に買い物なんだ…」

「しょーがねーじゃん。だって欄香さんの体調を考えたら俺達が行

くべきだろ。それに志野と一緒に外出できたんだから俺は嬉しいよ」
志野の顔がボツと紅くなった。

「ば、馬鹿者：／＼／」

こんな時の志野はとても可愛い。

「と、とにかく行くぞ：」

二人はマーケットへと足を急いだ。しかし：。

「見つけたぞ。貴様のコアメダル、貰うぞ」

「な！？」

目の前にはクワガタの怪物とそれを創った怪物が立っていた。

「俺はウヴァ。俺のコアメダル、返して貰う」

「志野、下がってろ」

「変身！」

『タカ・トラ・バツタ！タトバツ！タトバタトバ
！』

クワガタヤミーとウヴァはオーズに飛びかかった。それを予測していたのか、簡単にかわし、メダルをチェンジした。

『タカ・クジャク・コンドル！タ〜ジャ〜ドル
〜！』

タジャドルコンボにコンボチェンジをした。翼を展開させ、空へと舞い上がった。

「くそっ、あれになられては困る！」

「遅いっ！」

ウヴァは逃げようとしたが、オーズの放った火炎弾を背後から受けた。そのダメージで体内のコアメダル2枚が排出された。それを拾っていく。

「おっし儲けた！」

「く、くそっ…」

その時。紫のコアメダル5枚が飛来し、オーズの体内に入り込んだ。

「ぐっ、な、なんだ…！？まあいい。トドメだ！」

オーズは胸部に腕をかざし、タジャスピナーを出現させた。蓋を開いて中にドライバーのメダルと合わせて7枚を装填し、オースキヤナーでスキャンした。

『タカ・クジャク・コンドル・ギン・ギン・ギン！ギガスキャン！』
オーズは炎の翼で高く舞い上がりタジャスピナーを前方に構えて上空から両者に向かってマグナブレイズを放った。

「セイヤアーーーーーーー！！！」

ウヴァは避けたがクワガタヤミーは避けれずに直撃を喰らって爆散した。

「仕留め…ぐっ！」

オーズは倒れてしまった。スピナーの一部とメダルホルダーのメダルを何枚かをウヴァに奪われてしまった。

「あ……。た、達也…」

「そいつの命は無事だ。だが、何かが起こってるのかもな…」

【???】

「ほら、カザリ、アंक。お前達のコアだ」

「ふっ、世話になった」

「紫のメダル、オーズの中に入ったようだ」

Dr真木は呟いた。

「まさかオーズに渡るとは、かなり厄介な事態になりました」

「確かに。それは厄介な事ね」

「ああ。しかしDr。お前も同じ事じゃないのか」

「いえ。オーズは変身に使われると厄介。私とは違います」

【如月家】

「達也！大丈夫か！？」

「し、志野…」

「良かった…」

達也は志野の部屋で横になっていた。

「あのメダルは一体…」

その時、達也の眼が紫に光った。

「達也、どうかしたのか？」

「いや、何故か、いや、ヤミーの気配が…」

「まさか…。しかし」

TVの電源を入れた。そこで放送されていたニュースの内容に俺達は驚きを隠せなかった。

「たった今入ったニュースです！現在二条城にて恐竜の化け物が暴れているとの事です！現在京都府警が全力で排除運動を行っていますですが効果は全くなく、付近の住民への被害が心配されています。」

「まさか…」

「本当に…」

二人「当たるなんて…」

達也の体内に入ったコアメダル。これを軸に物語が新たな局面に動き出そうとしていた…。

第07話「知られざるメダルとコンボ」前編（後書き）

ついにDr真木登場です。最初からみんな仲間です。次回はいよいよ最強のあいつが……。こうご期待。

【次回予告】

「解っている!!」

「うああああああ!!」

『プテラ・トリケラ・ティラノ!! プトティラーノザウルス!!』

破壊者を守護者に変えろ、オーズ!!

第08話「知られざるメダルとコンボ」後編（前書き）

これでグリード編 part1は終了です。次回からは少し落ち着き、新しいライダーになったり力を手に入れたり、戦力増強みたいな展開です。

第08話「知られざるメダルとコンボ」後編

Counts the medals 現在、オーズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 バッタ×1 トラ×1 ゴリラ×1 シャチ×1

ウナギ×1 タコ×2 プテラ×2 トリケラ×1 ティラノ×2

「急ぐぞ二人とも！」

達也、信司「解っている！」

俺達は怪物が出現した二条城へ急いだ。二条城は京都の代表的な歴史建築物のひとつであり、破壊なんて事になったら大変だ。

俺達は二条城へと着いた。そこには雌雄のプテラノドンを模したヤミーがいた。

二人「変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タトバッ！タトバタトバ！』

達也はタトバコンボ、信司は龍騎に変身した。それぞれヤミーに攻撃を開始した。龍騎は善戦しているが、オーズの方は手も足もない状況だ。

「達也！」

龍騎はカードデッキからカードを一枚取り出し、ドラグバイザーに挿入した。

『MEDAL VENT』

龍騎の前に巨大なコアメダルが出現した。それ3枚を手に取りヤミーに投げつけた。

「それっ！」

メダルはヤミーの体を切り裂いた。こちらは順調だったが…。
「うあああああっ！」

達也は変身が解除された。側のベンチに後ずさりする達也。ヤミ

ーが光弾を達也に向けて発射した。もう手遅れかと思ったその時。
「!？」

達也の体からコアメダルが三枚現れ光弾を弾いた。その後綺麗にドライバーに収まるメダル。恐竜の鳴き声と共に眼が紫に光る達也。オースキャナーは自動でメダルをスキャンした。

『プテラ・トリケラ・ティラノ! プトティラノザウルス!』

「ウオオオオオオオオオオオオッ!」

プテラノドンを模した頭。肩にはトリケラトプスの角。足はティラノサウルス。全ての生物の頂点に君臨する恐竜のコンボ。その力は強大だった。一吠えで辺り一帯を凍らせてしまった。

「コノチカラハドウルイ？」

「ドウルイニシテ、テキ!」

ヤミーは空へと飛び、そこから攻撃をする様だ。オーズもプテラヘッドの力で上昇、ティラノレッグのテイルバインダーでヤミーを叩き落とした。地面に降り立ち、オースキャナーでメダルをスキャンした。

『スキャニングチャージ!』

オーズの眼が光り、肩の角がヤミーの体を捕らえた。ヘッドのウイングで冷気をぶつけ、凍り付けにしてテイルバインダーでヤミーの体を砕いた。セルメダルが一枚残り、オーズの手に収まった。オーズはもう片方の手を地面に突っ込み、メダガブリューと呼ばれる武器を取り出し、セルメダルを入れて恐竜の口を閉じきってバズーカモードに変形させた。『プットティラーノヒツサーツ!』

バズーカの引き金を引き、恐竜の咆哮と共に強力な光線が発射された。ヤミーは跡形もなく吹き飛び、セルメダル一枚となって消えた。

「ぐっ、あっ…!」

変身が解除され、メダルは体内へと戻った。達也はその場に倒れ

込んだ。それを介抱する志野。

「達也、しっかりしろ：！」

「うるせえ…、少し寝かせてくれ：！」

「あ、ああ」

達也はすやすやと眠りについた。その寝顔を見つめる志野。信司は場の空気を察したのか、その場から去っていた。

「達也、一人でガンバるんじゃないぞ」

志野は達也の額に軽くキスをした。そして深紅に染まる顔を隠すように二条城を眺めた。

【???】

「あのコンボ、見たこと無いな」

「ああ、恐竜なんて僕たちの力は及ばないしね」

「倒すとすれば、完全復活：！」

「その手段しかありませんね」

「今最も完全復活に近いのは僕とウヴァだね」

「ああ、今度は全員で行くか？」

「いえ、迂闊な行動は危険です。しばらくは息を潜めましょう」

第08話「知られざるメダルとコンボ」後編（後書き）

次回は志野に大きな変化が…！

【次回予告】

（嬉しいいっぱいだな！）

「私を置いていくな…！！」

「キバって行くぜ…！！」

運命^{さだめ}の鎖を解き放て…！！

第09話「打ち破れ、運命(さだめ)の鎖!」(前書き)

タイトルから推察できるようにあのライダーが登場します。

第09話「打ち破れ、運命(さだめ)の鎖！」

counts the medals 現在、オ
ーズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 バッタ×1 トラ×1 ゴリラ×1
シャチ×1

ウナギ×1 タコ×2 プテラ×2 トリケラ×1 ティラノ×2

今日は学校にて1年全体の校外研修に出掛けた。内容は奈良の観
光。

バスの中はみんなあれこれ話をしていた。現地まで一時間くらい
で到着するので会話の弾みが半端無く良かった。その中で志野は一
人にやけていた。

(達也の横が私、うん！嬉しさいっぱいだな！)

「志野、何笑ってんだ？」

「あ、いや、その…／／／」

どうしたんだ？赤い顔をして…。なんか、可愛い…。

「つきましたよ」

法隆寺に到着した。にしても、綺麗だな…。

「今は10時です。11時半までにはここに戻ってきてくださいね
！」

各自自由行動となった。俺と志野で行動することにした。

「法隆寺…。世界最古の木造建築…。すごい…」

みんなあまりの素晴らしさに哑然^{あぜん}としていた。

涼しげな風が吹く。それを受けて志野の髪が靡^{なび}く。それを見た達
也はその美しさに心を奪われる。

「達也」

「はいっ!？」

思わず声が裏返った。―何やってんだか…。

「行ってくる。ごめん！」

達也は走っていった。一人残された志野は…。

「あのままだと、確実に：／／／／。：達也が心配だ」

志野は達也の後を追っていった。

二人「変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タトバッ！タトバタトバ！』

声の聞こえた場所に行くとそこには獣の姿をした怪物が立っていた。

「お前か、奇声をあげている奴は」

「キエエエエエエエエエエ！！！」

「さあてと、こいつを倒して戻ろうぜ」

二人は怪物に攻撃を仕掛けた。相手は腕のクローで応戦してきた。

「くそっ、こいつ強い！」

「はっ！！」

龍騎は土手っ腹に攻撃を喰らってしまった。

「負けてられっかよ！！」

カードを1枚取り出してドラグバイザーに装填した。

『SWORD VENT』

龍騎の手に剣が握られた。それで怪物に斬りかかる龍騎。しかしあっさりと撃退されて変身が解除されてしまった。

「くそお！」

「下がってろ信司！」

『シャチ・ウナギ・タコ！シャシャシャウタ！シャシャシャウタ！』

シャウタコンボにコンボチェンジして応戦するが相手の力が強すぎて反撃をひまを与えられないまま倒された。

「達也！！」

イレギュラーが発生した。志野がこっちに来てしまった。

「私も戦う！」

「馬鹿言うな！今のお前には何もできない！だから離れて…」

「馬鹿野郎！！私をいつもそうやって遠ざけて！私だって見守る事くらいはできた！」

「志野…」

「だから…」

「私を置いてくな！！！！！」

「お前、戦う気はあるのか？」

「ああ、無論あるって…誰だ？」

「おれはキバットバット？世。なるほど、お前が皇の血を受け継ぐ奴か。よし、俺様の力を使いな！」

志野が声の聞こえた方を向くと変なコウモリもどきが飛んでいた。
「なんかへんなコウモリだが…ま、いい。この際なりふり構ってられない」

志野は一呼吸置く。

「キバット！！」

「おっしゃあ、キバって行くぜ！ガブッ！」

キバットバット？世が志野の左手の甲に噛みつく。志野の体に魔力が注がれていき、顔にステンドグラスの様な模様が現れ、腰に止まり木の様なベルトが出現した。

「変身」

キバットがそこに装着され、仮面ライダーキバの基本形態であるキバフォームへの変身が完了した。

「志野…！？」

「達也、これからは、私も戦う！」

また一人、仮面ライダーという名の戦士が誕生した。

いままで達也の戦いを陰から見守ってきた如月志野。今はどうだろう。前と変わらない？否。今、彼女は果敢に立ち向かっている。

仮面ライダーキバとして。

「はああっ！」

華麗な蹴りであいてを圧倒するキバ。相手は腕のクローでキバを斬りつける。

「おい、お前名前はなんていうんだ？」

キバットが話しかけてきた

「志野。如月志野」

「おっし志野、腰にある青いそいつを俺の口に付けてくれ！」

志野は腰にあった青いフェッスルをキバットバット？世の口に付けた。

「ガルルセイバー！」

狼の雄叫びと共にキバの体にガルルと呼ばれるモンスターが入り込んだ。するとキバの眼が黄色から青へと変わり、体の形状も変化した、右手にはガルルセイバーが握られていた。「うるおっ！」

志野の口調も野性的に変わった。その手に握られた剣で相手を切り裂いた。その後、キバの体からガルルが出て行った。

「よし、トドメだ！」

キバは腰の一つのフェッスルをキバットバット？世の口に付けた。
「ウェイクアップ！」

キバの右足に赤いコウモリの羽が現れ、周りが月夜に変化した。そしてジャンプしたキバはその足で相手の土手っ腹に蹴りを喰らわせた。

「キエエエエ……！！！」

相手は爆発し、ステンドグラスの欠片となって散った。

「やーっぱりこいつはファンガイアだったな」

「ファンガイア？」

「ああ、近頃人間に化けて人間のライフエナジーを奪ってる。まあ

生命力を吸い取ってる様な物だな」

志野は変身を解除し達也の元へ駆け寄った。

「志野、凄いな…」

「なんか今になって震えが…」

志野は体が震えていた。

「すまない、女の子に戦わせる事になるなんて…」

「いいって。これでもお前を助けられるしな」

そして帰りのバスの中。志野はすやすやと寝息を立てていた。その寝顔を見守る達也。

（やっべええ！すげえ可愛い！ドキドキするな…。）

「ん…、なんだ…、お前か…。むにゃ…」

志野が起きた。まだ若干寝ぼけていた。

「どうした？何か私の顔についてるのか…？」

「いや、お前の寝顔があまりにも可愛いもんで…。つい携帯の待ち受けにしちまった」

志野の顔が見る見る内に唐辛子の様に真っ赤になった。

「そ、そんな物を、お、お前…、お前だからその…、許してやらん

ことも…／／／」

「へ？何か言ったか？」

「な。何でもない！！」

二人の会話は平和そのものだった。この先に起こる事を知らず。ただ平和だった。

第09話「打ち破れ、運命(さだめ)の鎖!」(後書き)

次から日常の割合が増えます。期待してください。
次回は…!?

【次回予告】

(僕の馬鹿馬鹿!!)

(て、天使だ…。可愛い…／／／)

「僕はね…」

「生き残ってみせる!!」

『SURVIVE』
サバイブ

戦わなければ生き残れない!!

第10話「生き残るための力」(前書き)

第10話です。今回は信司と綾にスポットが当てられています。

第10話「生き残るための力」

何も無い平和な今日。^{こんにち}信司は暇そうに外を散歩していた。

「暇だな……。……そうだ」

信司は暇をつぶせるいい考えが浮かんだらしい。

「ここか……」

その家の標識には「篠原」と書かれていた。そう。ここは綾の家。信司は緊張する心臓を押さえながらもインターホンを押した。少ししてスピーカーの奥から声が聞こえてきた。

「はい、どちら様ですか？」

綾だ。信司は安心したのか、胸をなで下ろし、スピーカーに声をかけた。

「綾、俺。暇だからやってきた」

「あ、信司君？ちょっと待ってて」

信司はドアの前で待つこと数分…。

「いらっしゃい。さ、あがって」

綾は家の中ではとてもラフな格好だった。しかし、意中の信司がやってきたため、着替えたらしい。この年頃の女の子としては普通だ。

「んじゃ、おじやます」

綾の家はフランス風の家具でまとめられてあり、とても統一感がある。

「少し待っててね。紅茶入れるから」

「おう、ありがとな」

綾は平然と紅茶を入れていたが内心動揺していた。

（うわあああああ！！信司君来ちゃったよ！！もっと片付けてお

くべきだった……!! 僕の馬鹿馬鹿……!!」

綾は心の中でポカポカと自分の頭を叩いた。

「なあ……綾」

「な、何かな……?」

「唐突ですまない……」

「付き合ってくれ……!!」

「はあ……。」

「ありがとな。買い物に付き合ってもらって」

綾はあの時告白されたかと思った。正直そっちの方が良かった。
だが……。

「付き合ってくれ……!!」

「へ／／／／／／／／／／!？」

「買い物に……!!」

以上。これを意中の人に言われては年頃の女の子はショックだ。
信司は一方……。

(なんか、勢いで誘ったけど、緊張する……。周りから見たらこれ、
デートに見えるしな……／／)

正直彼の方が動揺していた。

「ねえ信司君……」

「な、何だ?」

信司はドキッとした。今の彼は一触即発の爆弾に近い。

「喫茶店、行こ」

「あ、ああ」

綾は喫茶店に信司を誘った。内心はこうだ。

（こうなったら、僕が信司君をその気にしてあげる！！）

喫茶店に入った二人。そこはこの近所でとても評判の良い場所だ。

「僕はこれにしよう」

「俺は…、これ」

二人は店の人に注文をした。

待つこと数分…。

「お待たせしました」

店の人が注文した品物を運んできた。机におかれたのは英国式紅茶が二つ、チョコケーキとチーズケーキ。

「いただきます」

綾は自分が注文したチョコケーキをフォークで一口ほど口に入れる。

「美味しい…」

口の中にほどよい甘さと苦みが広がる。

「綾…。チョコケーキ好きなんだな」

「あ…変？」

「いや、そんなことはないぜ」

「そ、そお？良かった。じゃあ…」

綾はフォークでチョコケーキを少し切り取り、信司に差し出す。

「食べる…？」

「ありがと。じゃあもうよ」

綾は信司の口にフォークをそっと入れる。信司の口にチョコケーキの味が広がる。

「美味しいな…。」

「でしょ。これ美味しいよね。」

心の中ではっ、両者は思った。これって…。

（間接キス！？）

「な、なあ綾。俺のも食べるか／＼？」

「え、い、良いの？それじゃあもらおうかな…／＼／」

信司は自分のチーズケーキを女の子の口に丁度良いサイズに切り取り、綾の口に運んだ。

「美味しい…」

そんな甘いひとときを堪能した二人は割り勘で会計をすませ、店の近くのベンチに腰を掛けた。

「ねえ、一つ、良いかな？」

「ああ…、何／＼／＼？」

「僕は…／＼／」

そんな時間を引き裂く一つの爆音。それを聞いて信司は爆発の方向を振り向いた。

「何だあれは…」

そこにはもの凄い形相の怪物が立っていた。

「ごめん綾。行ってくる」

信司はカードデッキ片手にその方向へ走っていった。

「あ！待ってよ信司君！！」

信司はデッキを構えた。バックルが信司の腰に出現した。

「変身！！」

信司はデッキをバックルに装填して仮面ライダー龍騎に変身した。

「行くぜ顔面野郎！！！！」

その敵の顔はとても威圧感が強かった。

「このムシャファンガイアに立ち向かう勇氣があるとはな。だが！！」

ムシャファンガイアは腰の刀で龍騎を一閃した。しかし…。

『SWORD VENT』

龍騎はドラグセイバーで防いでいた。

「危なかった。間に合って良かった」

龍騎とムシャファンガイアの斬り合いは熾烈を極めた。両者は互角に見えた。しかし…。

「くそ…」

龍騎に疲れが見え始めた。立っているのがやっとな。

「無理しないで信司君!!」

「綾!?!」

綾は陰から見守っていた。ムシャファンガイアは綾に向かって刀を投げる。

「間に合え!!」

龍騎はカードを一枚走りながらドラグバイザーに装填した。

『MEDAL VENT』

ドラグメダル三枚を重ねて盾にした。攻撃は防げた。しかし…。

「ぐっ!!」

メダル三枚はかなり重く、龍騎の体力を大きく削った。

「もう無理だよ!!」

「そんな事…、あるかよ…」

龍騎は力を振り絞って立ち上がる。

「俺は、綾を…守るために…」

「生き残ってみせる!!」

「信司君…」

その時、デッキから一枚のカードが飛び出した。それを手に取る龍騎。

「これは…?」

そのカードは燃えていた。烈火の如く。

龍騎は左腕を構えた。ドラグバイザーは炎に包まれ、ドラグバイザーツバイに変化した。開いている口にカードを装填した。

『SURVIVE』

龍騎の体は烈火に包まれ、龍騎サバイブへと強化変身が完了した。
「何!?!」

龍騎サバイブは無言でドラグバイザーツバイにカードを装填した。
『SWORD VENT』

ドラグバイザーツバイの先に剣の刃が出現した。ムシャファンガ

イアは刀で斬りかかるが、龍騎サバイブは刀ごとムシャファンガイアを斬った。

「何だこの力は!!」

「これは…生き残るための力だ!!」

龍騎サバイブはカードを装填しながらそう叫んだ。

『FINAL VEN'T』

ドラグバイザーツバイの刃に炎が纏われる。それでファンガイアを一閃した。烈火に包まれファンガイアは爆発して散った。

「ふう、終わった」

龍騎への変身を解除し、綾の元へ歩み寄る信司。

「お疲れ様信司君。その…格好良かったよ」

その言葉で心がいやされる信司。

「あと…僕、信司君の事が…好き／／／／／!!!」

その言葉に思わず顔を赤くする信司。綾の顔も真っ赤になっている。

「綾、俺もお前が好きだ／／／／／」

その瞬間、互いの思いが通じ合った瞬間だった。

「ねえ、キスして／／／／／」

「ああ：／／／／／」

二人はそっと唇を重ねた。初夏の風が二人の想いを彩る…。

第10話「生き残るための力」(後書き)

恋って、良いですね…。次回は達也と志野が…。の予定です。

【次回予告】

「気持ちいいな…」

「俺は、破壊者じゃない！守護者だ！！」

『プロテイルノザウルス！！』

街を守れ、オーズ！！

第11話「破壊者から守護者へ」(前書き)

また恋が実ります。学校の授業が難しい…。

第11話「破壊者から守護者へ」

counts the medals 現在、オ
ズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 バッタ×1 トラ×1 ゴリラ×1
シャチ×1

ウナギ×1 タコ×2 プテラ×2 トリケラ×1 ティラ
ノ×2

「むむむむ…」

志野は一人机に向かって唸っていた。その理由とは…？

「描けない…」

美術の課題である風景画に取り組んでいた。下書きは完成したが
着色が上手くいかない。

「うぁーーーーーーっ！！」

ついに我慢が爆発した。その勢いで紙が破れた。それを見て啞然
とする志野。

「……」

「おい、志野。どうし…！？」

達也が部屋に入ってきた。その目に映った物は散乱する紙。

「もしかして…課題？」

こくっ、と志野が無言で頷く。

「色塗り？」

再びこくっ、と頷く。

「やけくそで破いてしまった？」

さらに頷く。

「いっしょに…街で何か書くか？」

「うむ！！！！」

「とっくに完成している」

「おお——」

場所は変わって京都の中心部。古都と言えど近代的だ。結構人でにぎわっている。

「落ち着かんな……。人が多いのは学校だけで十分だ……」

「……／＼／」

達也は妙に落ち着いていなかった。何故かって？そりゃ……。

第三者から見たらまさしくデートだからである。

（意識してしまうな……。この間の法隆寺も……）

もう少しでキスをするところだった。それを思い出して赤くなる達也。

「しかし、おまえは馬鹿だな」

「馬鹿っておい……」

優しく微笑む志野の表情で言葉が止まる。あのときと一緒だ。

「私なんかのために、あそこまで……。本当に、馬鹿な奴だ」

一呼吸置き、

「だがな、私はそんなお前が……」

その言葉は途中で遮られた。目の前から車道を走る車を吹っ飛ばして何かがやってきた。

「ひゃあ——っはあ——！！最高最高——！！」

ファンガイアが爆走していた。見た目は……馬？いや……角があるから……。

「志野、任せろ」

達也はオーズドライバーを装着、コアメダルを三枚装填してスキヤンした。

「変身——！！」

『タカ！トラ！バッタ！タトバ！タトバタトバ——！！』

仮面ライダーオーズタトバコンボに変身が完了した。

「さてと、倒しますか」

爆走するユニコーンファンガイアをキックで吹っ飛ばすオーズ。ビルに直撃し、がれきに埋もれるファンガイア。しかし…。

「うぐっ!!」

がれきの中から角が飛び出てオーズの右肩を貫いた。

「やるじゃねえか：いわゆるとっておき？こっちにも：あるぜ」

オーズの体内から紫のメダルが排出され、角を砕いた。それは自立的にドライバーに装填され、スキャンされた。

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プトティラノザウルス!!』

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

プトティラコンボ。その咆哮はがれきを吹っ飛ばし、ファンガイアに強烈な威嚇を与えた。

「この俺の爆走をじやまする奴は許さないぜえ：!!!!」

ファンガイアは角を剣状に変形させ、それでオーズを斬りつける。

「ウオオオオオオオオ!!」

オーズは地中からメダガブリューを取り出して応戦する。しかし、闇雲に振っても当たりはしない。「はっ!!！楽勝楽勝!!！」

いとも簡単にカウンターを受けるオーズ。

「達也あ!!」

志野が駆けつけて叫んだ。

「メダルごときに支配されるな!!！私の、私の惚れたお前は、そこまで弱くは無かったぞ!!！」

——そうだ。俺は、俺は…!!！

志野の目の前で、負けてたまるかああああああ!!！！

「はあっ!!！」

オーズはメダガブリューを正確にファンガイアへ命中させた。

「達也…？」

志野の方を向き、こう言った。

「ありがとな。お陰様で打ち勝てた。待ってろ、すぐに終わらせる」

「達也…！」

ファンガイアは剣を構えてオーズへ向かう。

『ガブガブガブガブゴクン…！』

セルメダルをメダガブリューに装填し、口を閉じて再度開く。

『プティラーノヒツサーツ…！』

迫り来るファンガイアの懷に刃を食い込ませ、一気に力を解放する。グランド・オブ・レイジの発動だ。

「うおおおおお…！」

ファンガイアはステンドグラスとなり、爆散した。

「疲れた…」

如月家のリビングでくつろぐ達也。

「達也」

「志野…／＼」

志野は風呂上がりだった。石けんの香りが漂い、浴衣一枚のみの服装はドキドキする。

「今日は—」

「…！！」

達也の唇に志野の唇が重なる。

「あの続きだ。私はお前が好きだ」

ボツ、と顔が赤くなる達也。

「お。俺も好きだ…！」

二人の想いが通じた。顔を赤く染めながら、互いの部屋へと戻っていった。

第11話「破壊者から守護者へ」(後書き)

次回からはベルトさん作「仮面ライダーエターナル」風都を守る永遠の戦士」

の主演二人、上野進也君と松下里美ちゃんが準レギュラーで出演します。ベルトさんタイトル間違っていたらすいません。

【次回予告】

「上野進也です。」

「松下里美です。」

「二人もライダーなんだ。」

「いきますよ!!」

『エターナル!!』

『フィ・ス・ト・オ・ン!』

これで決まりだ!!

第12話「風に乗ってやって来た転校生」 (前書き)

ついに進也君と里美ちゃんが登場します。ベルトさん、見えますかー？

第12話「風に乗ってやって来た転校生」

「志野、愛してる」

「ば、馬鹿者：／／／／」

「志野：」

「うわっ、ちょ、こんな所で：ひゃっ！！」

「夢か……」

志野は目が覚めた。夢でまさか達也にあんなことをされるとは。

「汗：かいたな。シャワーを浴びるか……」

志野は部屋を出てシャワールームへと足を運んだ。脱衣所で汗に濡れた浴衣を脱ぐ。

シャワーを浴びながら志野は思った。

（うう、また大きく……）

志野は自分自身の年齢不相応に発達した胸を非常に気にしていた。

「しかし、達也が好きと言うなら……」

シャワールームを出て制服に着替え、リビングへ向かった。

「よっ、志野おはよう！」

「ああ：／／／」

どうしたんだ志野？ 様子が……

ぽん。

「ひゃうっ！！」

志野が声をあげた理由は突然自分の額に手を当てられたからだ。

「：ははは！ お前がまさかそんな声を：！！！」

「ば、ば……」

「？」

「馬鹿者おおお！！！！！」

志野が竹刀で達也を叩こうとした。しかし…。

「あれま…」

紫のメダルが飛び出て竹刀を押さえていた。

「切り捨て…御免!!!!!!」

ばしいん!!!

「いでええええええええええ!!!!!!」

メダルを強引に突破して達也の右足に竹刀は命中した。

京都鳳凰学園高等部は本日より衣替え。夏服が新しい。それとは別のいつもと違った事があった。教卓の方に見知らぬ男女生徒がいたからだ。

「今日は、転校生を紹介します。風都からやってきた上野進也君と松下里美さんです」

「上野進也です。みなさん、これから宜しくお願いします」

キャアアアアアアアアア!!!!女子全員（志野と綾以外）が黄色い声をあげた。それもそのはず。だってカッコいいから。

「おーい五月蠅いぞ」

ピタッ。

信司の一声で止まった声。ああ…素直だな。

「松下里美です。宜しくお願いします」

可愛い可愛い可愛い可愛い!!!!今度は男子（達也、信司以外）が声を出した。まあ、可愛いけどな…。

「みんな静かにして!!」

綾の一声で止まった。こいつら…。

「君達が転校生?よろしく。俺は神代達也。よろしく」

「私は如月志野だ。これからよろしく頼む」

「俺は龍川信司!よろしく!!」

「僕は篠原綾。よろしくね」

いつもの四人が自己紹介をした。

「改めて、俺は上野進也。よろしく、ライダーさん達」

「「！？」」」

三人（達也、志野、信司）は驚いた。ライダーであることを見抜いているからだ。

「君達のはここに来る前にとある知人から聞いたんだ。俺もライダーなんだ」

「あの…上野君…」

「あ、ごめん松下さん」

「松下里美です。これから宜しくお願いしますね。私もちなみにライダーです」

一通り自己紹介を終え、俺たちは授業に臨んだ。

「はぁ…数学難しい…」

「あれ位簡単だ。出来なくてどうする」

難しいのは難しい。二次関数とか因数分解とか…、訳分からん！！

「志野…また教えてくれ」

「仕方がないな。特別に教えてやろう」

そんな話を俺たちは食堂で進也と里美が住んでいた風都名物「風都ラーメン」を食べながらしていた。なるとがめちゃくちゃ大きい。でも美味しい。

「いつか二人のお手並みを拝見したいな」

「ははっ、いつかな」

進也のライダーはエターナル。ガイアメモリと呼ばれる装置を使って変身するらしい。里美のライダーはイクサ。キバと同じフェツスルを使うらしい。

「にしても美味しいなこのラーメン」

「だろ！！風都ラーメンは最高だ！自慢できるぜ！」

（上野君、テンション高いですね…。ラーメンを褒められて嬉しいのでしょう）

そんなことを考えながら里美はラーメンのスープを啜った。

「さあて、帰り：」「ばごおん！！」：」

爆発音が聞こえた。校庭からだ。

「おい、あれ：」

達也が入学したときと同じように何かが飛来した。

「ミツケタゾ、ウエノシンヤ：ソシテ、マツシタサトミ：」

「おいおい、こんな所まで来るのかよ。ったく、こんな事になるならあんな道通るんじゃないかったよ」

「道？」

「ああ、ここに来る途中で石で出来た菩薩像を壊したんだ」

「あれは崇りって事か：」

京都なら道ばたに菩薩像があってもおかしくはないな。

「松下さん、行くよ」

「はい、上野君」

進也はロストドライバーと呼ばれるベルトを装着した。制服の内ポケットからガイアメモリを取り出してスイッチを押した。

『エターナル！』

「変身！」

ガイアメモリをドライバーに装填し、展開した。

『エターナル！』

進也の体はエネルギーに包まれて仮面ライダーエターナルに変身した。

「さあ、お前に罰を与えよう！」

里美はイクサナツクルを左手の平に当てた。

『レ・ディ』

待機音が鳴り響く。

「変身」

事前に装着したベルトにイクサナツクルをセットした。

『フィ・ス・ト・オ・ン』

里美の体をシルエツトが通過して仮面ライダーイクサバーストモ

ードへ変身が完了した。

「その命、神様に返して下さい！」

エターナルはエターナルエッジ、イクサはイクサカリバーを右手に持って崇りの具現化した敵（以後崇りと表記）に斬りかかった。

「タタリジャア！」

崇りは波動を放つ。しかし、効果はなく、斬撃を喰らう。

「面倒だからさっさと決める！」

エターナルはガイアメモリを取り出してベルトのドライバーに装填した。

『バイオレンス！マキシマムドライブ！』

「暴力の記憶」を持つバイオレンスメモリを装填した。エターナルの右腕が徐々に大きくなる。

「松下さん、足止めお願い！」

「分かりました！」

イクサはイクサカリバーに付けられている銃口を崇りに向け、引き金を引く。放たれた銃弾は崇りに命中。崇りはイクサの方を向く。

「バイオレンス・ナックル！！」

バイオレンスメモリの力を纏った右腕は崇りを地面に叩き伏せた。

「タ：タリ：！」

崇りは成仏した。

「お見事……」

第12話「風に乗ってやって来た転校生」(後書き)

これから二人は準レギュラーで登場します。12／7すいません、かなり後の展開を考えながら投稿したためここと小説の最後を間違えました。すいません。

【次回予告】

「み、見るな!!」

「明るくない信司君は…嫌だよ…」

「おばあちゃんが言ってたなあ…」

『CAST OFF』

天の道を行き、総てを司れ!!

第13話「おばあちゃんの言っていたこと」(前書き)

この話で作者的には基盤が整いました。次回から新シリーズでした。すいません。

【信司の自宅】

「はぁ……はぁ……、夢、か……。」

信司の夢だった。信司は全身冷や汗だ。

「正夢にならなければいいんだが……。」

信司は汗で濡れた服を洗濯機に入れて制服に着替えた。

「はぁ……、一人って、寂しいな……。」

信司は一人暮らし。その理由はいずれ語る時が来るだろう。

「さて、行くか……。」

信司は身支度を調べ、登校を始めた。信司は学校とは逆の方向へ歩いていった。その理由とは……？

「おはようございます、信司ですが……。」

「信司君ごめんね。毎日来てくれて。」

行き先は綾の家だ。毎日信司は登校する際に迎えに行っている。

「おはよ。ごめんね、毎日。」

「いいって。んじゃ行こうか。」

二人はいつも通り登校した。

（あの夢……。いや、考えない方がいいな……。）

【学校】

「うっす！二人ともおはよう……いててて……」

そう元気な挨拶を投げかけたのは神代達也。仮面ライダーオーズに変身する本作主人公。

「あぁ……。」

信司はあの夢のせいなのか、声に気力が無かった。

「どうした信司、元気ないな……。」

「あぁ……、今日は調子が良くないんだ。ごめん……。」

信司は俯いた表情で返事をした。

（信司君……どうしたんだろ……。）

昼休み、生徒の大半が食堂で昼食を食べている時間帯。信司は一人校庭を一望できる

ベンチに座っていた。信司がいる場所は生徒達に人気の場所だ。

「信司君…。」

「綾…。」

綾が信司を心配してやって来た。信司の横に座り、手に持っていたおにぎりを渡す。

「少しは食べないと体持たないよ。」

信司は綾の気遣いが嬉しかった。普段は喜びを声に出すが今は…。

「ありがとう…………。」

言葉こそ普段と変わりなかったが声に喜びが感じられなかった。

「どうしたの？今朝から元気ないよ。僕で良ければ聞いてあげるよ…。」

信司はその優しさが今になっては痛かった。もしあの夢が現実になっってしまった事を

思うと気遣いがとても心苦しい。

（綾に話しても…………。）

「もうどうしたの！！いつもの信司君は明るくて、楽しいはずだよ！！」

綾が痺れを切らして声を荒げた。

「綾…。」

「僕は…、明るく…」ない…信司君…は。…嫌だよ…………。」

綾の瞳から涙がこぼれる。それを目の当たりにして信司は…。

（話すだけ、話してみるか…。落ち込んでてもしょうがないしな…。）

「じゃあ話すよ。実は…………、…………!？」

信司は何かを感じ取った。——これは殺気！！まずい、綾を避難させないと！！

そう考えている間に敵がやって来た。

「何だこいつ！！ファンガイア！？いや、違う！！」

見た目は体皮が緑色の怪人数体と、それを従える見た目は騎士の様な怪人だ。

「キルルルル……!!」

その怪物の名前はワーム。人間に擬態することができる怪人。サナギ態と呼ばれる緑色の形態から脱皮して成虫体になる。

「変身!!」

信司は龍騎に変身した。迫り来るサナギ態を蹴りや拳で応戦する。
「数だけでは意味が無いぜ!!」

龍騎はデッキからカードを取り出してドラグバイザーに装填した。
『ADVENT』

龍騎の契約モンスター「ドラグレッタ」が現れ、尾を駆使してサナギ態を攻撃する。

「ギャアア……!!」

サナギ態は爆発して消えた。しかし…。

「ぐあっ!!」

龍騎は高速で斬りつけられた。——くそっ! さっきの奴か? 早すぎる!! 見た目からして…ソルジャーっぽかったな…。

ソルジャーワームはクロックアップと呼ばれる高速移動を使っていた。それはワームが

成虫態になると使用できる特殊能力。

ソルジャーワームはクロックアップで接近し、抵抗できない綾の首根っこを掴む。

「うっ……、苦しいよお…、信司君、助けて…。」

「この光景…!」

その光景は信司の夢と瓜二つだった。綾が人質に取られ、自分は体が限界で立っているやっとな。

「やめてくれえ!! 綾だけはあ!!」

信司は綾が人質に取られたこと、悪夢が正夢になった事でパニックになった。

「キルルルルルル………。」

ソルジャーワームは手にした剣で綾の心臓を――。

ガキーン！！

貫こうとしたが失敗した。何かがワームの腕に当たり、綾を解放した。

「何これ……？」

綾の目の前には赤いカブトムシみたいな装置が浮かんでいた。綾の返事を待っているのか、その場から動かない…。

「もしかして…。」

綾はふと昔の事を思い出していた。

【10年前】

「綾や、もし将来命の危険に会う事があるかもしれん。だけど、良い子にしていたら

きっと助けになる力が来るよ。だから、良い子にしときんさい。」

「うん、僕、良い子になるよ。お婆ちゃん！！」

【現在】

「これが、お婆ちゃんの言っていた、力？」

綾はその装置を掴み、構える。

「お婆ちゃんが言ってたなあ…、悪が古今栄えた試しは無いって。」

「！？」

「変身！！」

腰に現れていたベルトにその装置を取り付けた。

『HENSHIN』

綾の体を装甲が包み、仮面ライダーカブトマスクドフォームへの変身が完了した。

「綾……。」

カブトは龍騎の方を向いて

「信司君。これからは、僕も戦うよ！」

「キルルルルルル………!!」

ソルジャーワームは剣を構えてカブトへ迫る。

「馬鹿だなあ。そんな猪突^{ちよとつもうしん}猛进じゃ勝てないよ。」

カブトはゼクターホーンを真ん中に動かした。待機音と共に装甲が浮き出る。

「キャストオフ！」

ゼクターホーンを反対へ完全に動かした。

『CAST OFF』

その音声と共にマスクドアーマーが弾け飛ぶ。

『THE NGE BEETLE』

マスクドフォームからライダーフォームへのチェンジが完了した。弾け飛んだアーマーでワームは吹っ飛んだ。

「キルルルルルル………!!」

ワームがクロックアップで移動を始めた。カブトは落ち着いている。

「僕だって使えるよ。クロックアップ！」

『CLOCK UP』

カブトもまたクロックアップで移動を始めた。

【クロックアップ空間】

「はあっ!! てやっ!!」

ここはクロックアップ空間。クロックアップ空間とはクロックアップを発動している

者同士が戦っている場所を指す。（正確には時間の流れが発動者からの視点でほぼ止まっているに等しい）

「そろそろ終わろ。信司君が心配だし。」

「ONE TWO THREE」

カブトはゼクターのスイッチを順に押した。ホーンをマスクドフォームの状態に戻した。

「ライダーキック。」

ホーンを再度元に戻す。頭の角から電流が右足に向かって流れる。

「R I D E R K I C K」

ワームの剣撃を回避し、背後に回り込んでキックを命中させた。

「キルルルルルル……！！！！！！！！」

ワームは緑色の炎に包まれ、爆発した。

変身を解除し、信司の元へ歩み寄る。

「綾、まさかお前もライダーになるなんてな。驚いたぜ。」

「えへへ、お婆ちゃんの言いつけを守ったからかな？」

微笑む綾の顔を見て安心した信司。

「無茶はするなよ。ライダーになったからには覚悟、できてるよな。」

「うん。覚悟はできてるよ。」

「んじゃ、ライダーになったお祝いに……」

「……………！！？」

信司の唇が綾の唇に重なっていた。

「もう、信司君ったらあ…………………」

強い決意を綾の瞳から感じ取った信司は、安心して教室へと足を運んだ。その後を追い

かける綾。その光景は平和そのものだった。

第13話「おばあちゃんの言っていたこと」(後書き)

おばあちゃんの言っていたことは正しいですね。うん、正しい。
次回から新シリーズです。おもいきってチャレンジです。

【次回予告】

「俺は門矢士^{かどやつかさ}。仮面ライダーディケイドだ。この世界は何だ？」

「破壊者め、ここにいたかあ!!」

「しつこいんだよ!! 変身!」

『KAMEN RIDER DECADE』

全てを破壊し、全てをつなげ!!

第14話「秘密結社と破壊者」(前書き)

新章「ショックー編」です。

第14話「秘密結社と破壊者」

counts the medals 現在、オーズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 バッタ×1 トラ×1 ゴリラ×1
シャチ×1

ウナギ×1 タコ×2 プテラ×2 トリケラ×1 ティラ
ノ×2

【写真真館】

「おーいなつみかん、お茶はまだかー？」

そう言ったのは門矢士。かどやつかさ世界を旅している。世界と言っても、アメリカや中国などではない。ライダーの世界を旅している。仮面ライダーディケイド。

「夏海です！お茶くらい自分で用意してください」

「まあまあ夏海や、そう言わずに」
ひかりなつみ

光夏海。写真真館館長の孫。ちなみに本作ではキバールには変身しない。

ちなみに館長とは先程夏海を宥めた光栄二郎。笑顔が優しい御年輩。

「なあ士、次の世界ってどこだ？」

「よいしょっと」

本来写真を撮影するときの背景を降ろす紐を引っ張るとこの写真館では次に行く世界のジオラマ？が降りてくる。それを引っ張ったのは小野寺ユウスケ。士が最初に行った「クウガの世界」の仮面ライダークウガ。ずっと共に旅を続けている仲間だ。

「これは…？」

背景のイラストはオーズタバコンボを中心に円を描いて守るようにキバ、龍騎、カブト、エターナル、イクサが立っていた。

「面白そうな世界だな…」

【如月家】

「でだな…ここはこの公式を使うと…」

「おお、なるほど…解りやすい」

達也は志野に数学を教えて貰っていた。今やっているのは解の公式を使った問題だ。

「では今日はここまでだ。続きはまた明日な」

「おう、ありがとな、志野」

達也は勉強道具を片づけた。

「んじゃ、おやすみ、志野」

「ああ、おやすみ」

二人はそれぞれの自室に戻っていった。

【翌日】

本日から達也は夏休み。

「おはよう綾」

「あ、達也君おはよう！」

外を志野と二人で歩いている際に達也が声をかけたのは篠原綾。小学校時代の幼なじみ。

そんな何気ない会話をしていると、目の前の空間がゆがんだ。銀色のオーロラの様だ。そこから大量の怪人が現れた。

「うわっ、多っ!!」

「ぼさっ、とするな!行くぞ!」

「OK!」

『タカ!トラ!バッタ!タトバ!タトバタトバ!!』

「ガブッ!!」

『HENSHIN』

「「変身!!」」」

達也はオーズ、志野はキバ、綾はカブトに変身した。

「あれっ、綾、変身できたっけ？」

「うん、ちょっと前にね」

「はあっ!!」

キバは右手の「吸血刀・紅蓮」で怪人を斬る。吸血刀・紅蓮は本作品オリジナルの武器。

「あーもう鬱陶しい!!」

『タカ!ウナギ!バッタ!』

オーズタカウバヘフォームチェンジし、その手に握られたムチで怪人を打ち付けた。

「クロックアップ♪」

『CLOCK UP』

カブトは高速で動き、その手に握られたカブトクナイガンのクナイで怪人を斬った。

「まだ…いるよ…」

「本当に鬱陶しい…」

『ATTACK RIDE SLASH』

その音声と共に怪人が斬られて爆散した。

「ふう、一丁上がり」

「誰、あんた？」

そこにいたのは仮面ライダーディケイド。世界の破壊者と言われているが今となっては過去のあだ名だ。

「俺は門矢士。仮面ライダーディケイド。この世界はなんだ？」

「この世界はって…」

ディケイドの行ったことがいまいち飲み込めないオーズ。

「とりあえず説明してやるから着いてこい」

言われるがまま変身を解除して達也たちは士の後を着いていった。

【光写真館】

「よっ、お三方」

「信司君、それに進也君と里美も…」

先に光写真館には信司、進也、里美が到着していた。

「まずは、自己紹介からだ。俺は門矢士。仮面ライダーディケイドだ」

「私は光夏海です」

「俺は小野寺ユウスケ」

「僕は海東大樹」

「僕は光栄二郎じゃ、ほい、コーヒー」

自己紹介しつつ栄二郎はコーヒーを振る舞った。それを一口飲む。

「「美味しい…」」

三人そろって同じ感想。

「俺達は、ライダーの世界を旅している」

「ライダーの世界？」

「そう。ライダーにもいろいろあるでしょ。そのライダー固有の世界を巡る旅をしているんだ」

大樹が答える。その説明は解りやすい。

「んで、俺達の世界にやって来たって事か」

「その通りだ」

達也は一つ質問をした。

「でも何で俺達の世界に？」

「多分、それは…」

ずどおおおん！！

「チッ、もう来たか！」

「何が来たんだ!？」

「着いてこい！」

「この街は、今日よりショッカーの日本拠点とする！抵抗は許さない！」

ショッカー。それは悪の秘密結社であり、以前にディケイドと戦ったことのある組織。「やっぱりな。来るぞ!!!」

「イーッ、イーッ！」

ショッカー戦闘員やら怪人やいろいろなやつて来た。

「変身!!!」

『KAMEN RIDE DECADE』

『KAMEN RIDE DIEND』

「まずは俺達の実力を見せてやるぜ！」

士はディケイドに、大樹はディエンドに変身した。

「イーッ!!!」

一人の戦闘員の掛け声で一斉に襲いかかるショッカー陣営。

「はあっ！」

ディケイドはライドブッカードソードモードで敵を容赦なく斬る。

「僕からのプレゼント。光栄に思いたまえ」

ディエンドは変身の際に使ったディエンドライバーと銘打ってある銃にカードを装填した。

『KAMEN RIDE KICK HOPPER』

銃身をスライドさせて再度カードを装填した。

『KAMEN RIDE PANCH HOPPER』

「行ってらっしゃい」

ディエンドは銃の引き金を引いた。銃口から光が二つ発射されてそれは仮面ライダーキックホッパーと仮面ライダーパンチホッパーを呼び出した。

「お前達、今俺の事を笑っただろ…」

「最悪は最高なんだよ…」

両者からは地獄に堕ちたようなオーラが漂う。そして敵に攻撃を仕掛けた。

「士、ここは僕に任せたまえ。君達は別箇所の調査を頼む」

「ああ、解った！」

そう言ってディケイド始め一行は別の場所へと走っていった。

「でも、この数は多いな…もう二人ほど呼ぼう」

ディエンドはカードを二枚装填した。

『KAMEN RIDE ACCEL』

『KAMEN RIDE FOUZE』

先程と同じ要領で仮面ライダーアクセルと仮面ライダーフォーゼベースステイツを呼び出した。

「さあ、振り切るぜ！」

「宇宙、キターー！！！」

ディエンドによるライダー陣営VSショッカー陣営の戦いが始まった。

「海東、大丈夫だろうか…？」

達也は走りながらそう呟いた。

「あいつはそう簡単には倒されない。安心しろ」

「ああ…っと、お客さんだぜ」

ショッカーの軍団がここにもいた。

「変身！」

『タカ…』

「グアッ！！！」

変身中に攻撃された。反則だろ、それは。

「痛ててててて…」

「アホか、お前は」

「ああ士。こいつはアホだ」

志野……。

「でも、私にとってはかけがえのない存在だ」

ディケイドは「フッ」と笑い、ショッカー陣営に攻撃を仕掛けた。

「おのれディケイド、また邪魔をするか！」

「五月蠅い」

戦闘員の声に聞く耳持たず。容赦なく斬ったり撃ったり。

「達也、ぼさつとしてる暇があったら変身しろ」

「お、おう。変身！」

『タカ！トラ！ショッカー！』

「アレ！？タトバじゃない！？」

オーズはよくドライバーを見てみた。すると…。

「しまったああああああああああ！！！！バツタメダルじゃない
いいいいいい！！！！」

変身中に攻撃された際に戦闘員が持っていたメダルが紛れたよう
だ。

「馬鹿者！！あれほどしっかり管理しておけと言ったはずだあ！！」

「イーッ！申し訳ありません！！」

「まあいい。倒せば問題ない！」

達也はショッカー戦闘員のやりとりを見て思った。

（こいつら…天然^{ばか}だな…）

迫ってくるショッカー戦闘員をパンチとキックで迎撃する。

「あれ、怪人だけだけど、何か弱点がわかる…」

その理由はショッカーレグの力。ショッカーと改造された怪人の
構造が一目でわかる優れもの。

「あぎゃー！」

「びゃー！」

ほんのパンチとキックを一発当てるだけで倒れていく怪人達。

「そうだ、ひらめいた！」

オーズは真ん中のメダルを抜き取って別のメダルを装填してスキヤンした。

『タカ！ウナギ！シヨツカー！』

オーズはタカウシーという名前だけはとても間抜けなフォームへチェンジした。

「これでどうだ！」

『スキヤニングチャージ！！』

シヨツカーレッグから両手に持たれているムチにエネルギーが流れる。そのムチを思いっきり振り回し、怪人を一掃した。

「まだやるか？」

「ひっ！覚えていろ！」

残った戦闘員は逃げていった。

「落ちていた夏休みは過ごせそうに無いな……」

そう呟きながらオーズは変身を解除した。

【シヨツカー日本侵略部隊本部】

「なんだと！百体もの怪人が倒されただど！」

シヨツカーの幹部、死神博士は そう怒鳴った。

「れ、例のメダルを……」

「貴様ああああ！！！」

「イーッ！！！」

報告にきた戦闘員は博士によって処分された。

「ふ……面白い。我々を倒せる者なら倒して見せろ、仮面ライダー」

第14話「秘密結社と破壊者」(後書き)

タマシーコンボを後々に登場させます。多少なりともメダルの所持数が変化しますので…。ディケイドを使うと話が組み立てやすいです。

【次回予告】

「私は、宇宙で最も迷惑な存在、ハイパーアポロガイスト」

「新しいカード…!?!」

『HYPER CAST OFF』

戦わなければ天の道は進めない!!

ライダー解説（前書き）

ここでは今まで登場したライダーの解説をメンバーが和気藹々と行います。

ライダー解説

達也「いつも！」

志野「この作品を読んでくださって！」

二人「ありがとうございます！！！」

達也「んで、何するんだ？」

志野「うむ、私たちの変身するライダーの解説をするらしい」

達也「誰が？」

志野「さあ…」

雪羅「それは、あなた達よ！」

二人「わあっ！！！」

雪羅「いやー苦しかった」

志野「作者よ…どこから…？」

雪羅「パソコンの外からこんなにちはー、なんて冗談よ」

達也「とりあえず、解説しようぜ」

志野「うむ」

一時間目「オーズ」

変身者 神代達也

キーアイテム コアメダル

登場第02話より

達也の変身するライダー。本作品主役ライダー。封印を達也が解

いてしまい、グリードが復活。再び封印するためにオーズの力と数枚のコアメダルを手に封印の旅に出る。志野の母欄香とは旅の途中で再会した。

コンボリスト（登場した物のみ）

タトバコンボ（タカ×トラ×バツタ）固有能力 無し

オーズの基本形態。能力のバランスに優れる。オールラウンドに立ち回ることが可能。

サゴーズコンボ（サイ×ゴリラ×ゾウ）固有能力 重力操作
重量系コンボ。高いパワーと防御力を誇る。重力操作によって空中の敵を叩き落とすことも可能。

タジャドルコンボ（タカ×クジャク×コンドル）固有能力 飛翔
鳥系コンボ。他のコンボとは一回り強力な総合的な強さを持つ。本コンボ時のみ、タカヘッドはブレイブ化する。

シャウタコンボ（シャチ×ウナギ×タコ）固有能力 液状化
水棲系コンボ。柔軟な体躯を駆使して戦う。水中では無類の強さを誇る。

プトティラコンボ（プテラ×トリケラ×ティラノ）固有能力 コアメダル破壊
恐竜系コンボ。グリードらも知らなかった最強コンボ。全コンボの中で唯一コアメダルの破壊が可能。

達也「ま、オーズはこんな感じかな」

志野「予想以上に疲れるな…」

雪羅「文字数が…」

二人「お次は…」

信司「龍騎だぁ！」

達也「どわぁ信司！どっからやって来た！」

信司「鏡の中。龍騎の能力だ」

志野「その能力で綾の着替えとか毎日のぞいてはいないだろうな…。」
本当なら綾の親友として許せない…！」

信司「馬鹿馬鹿！！着替えはのぞいて…」

綾「信司君のエッチ…／／／」

信司「綾ぁ！」

達也「俺が処刑する」

『プロテイルノザウルス！』

『スキヤニングチャージ！』

信司「ぎゃあああああああああ！！」

綾「それじゃ、龍騎の解説だよ」

二時間目 「龍騎」

変身者 龍川信司

キーアイテム アドベントカード

登場第04話より

信司が変身する仮面ライダー。ドラグレッタと呼ばれる契約モンスターとの契約で龍騎の力を手に入れる。どのような経緯で手に入れたかは不明。

アドベントカードリスト

ソードベント…ドラグセイバーを出現させる。AP2000

ストライクベント…ドラグクロウを出現させる。AP2000

アドベント…ドラグレッターを召喚する。AP5000

ガードベント…ドラグシールドを出現させる。GP2000

メダルベント…ドラグメダル三枚を出現させる。AP3000（ベルトさん提供）

クロックベント…クロックアップと同じ早さで動く。AP2000（ベルトさん提供）

メモリーベント…コピーベントとほぼ同等。一度コピーすると次回から自由に使える。AP3000（ベルトさん提供）

チェーンベント…ドラグチェーンを出現させて相手を縛ったりと色々…。AP2500（ベルトさん提供）

ポーズベント…信司の意志を無視してあのライダーのせりふとポーズを纏めて行う。AP1000（ベルトさん提供）

ファイナルベント…ドラグレッターと共同で武器に応じて必殺技を繰り出す。

サバイブ（烈火）…龍騎を龍騎サバイブへ強化変身させる。

バーストベント…一定時間能力を強化する。効果消滅後はしばらく

く能力の低下がある。AP7000

信司「痛ててて…」

綾「信司君、大丈夫？」

信司「ああ……なんとか…」

綾「見たいなら言ってくればいいのに…」

信司「ん？」

綾「何でもないよっ!!」

ライダー解説（後書き）

アドベントカードのポイントが間違っていたらご指摘お願いします。
他のライダーは順次乗せていきます。

第15話「HYPER BEETLE」(前書き)

速すぎますが綾が覚醒します。

第15話「HYPER BEETLE」

「はぁ、はぁ…」

信司達は走っていた。

「信司君…ちよつと休憩…」

綾が脇道に座った。信司もそれに続く。

「大丈夫か？戦うのに支障は…」

「もう…」

綾は呆れていた。唐変木じゃないけど…。

「飲んで落ち着け」

信司は綾に自販機で買ったお茶を手渡した。

「ありがと」

缶を開けてお茶を飲み始めた。

「達也君、大丈夫かな…？」

「あいつは大丈夫だ」

「ふっ、自分たちの心配をしたらどうだ？」

「「!？」」

目の前には戦闘員と赤い怪人が立っていた。

「私はハイパーアポロガイスト。地獄からよみがえった。今は宇宙で最も迷惑な存在だ」

「自覚しているならさっさと消えてくれ。行くぞ、綾！」

「OK！」

「「変身!！」」

『THENG BEETLE』

龍騎とカブトに変身した二人。ドラグセイバーとクナイガンを構えて戦闘員をばこにする。

「やはり…私が出向こう」

信司はデッキからカードを一枚抜き取った。

『SURVIVE』

炎に包まれて龍騎サバイブへ強化変身が完了した。（以後龍騎S）

「新しいカード！？はあああああああ！！」

デッキからカードを一枚抜き取り、装填した。

『BURST VENT』

龍騎Sの体に赤いオーラがまとわれる。BURST VENTは一定時間戦闘能力を上昇させる。

「くっ、こいつ、手練れだ！！」

Hアポロガイストを苦しめる龍騎S。しかし…。

「ぐっ！！くそっ、もう時間切れかよ…！！」

BURST VENTは解除されると代償として強烈な痛みを体が襲う。

「はははは！！貴様など敵ではない！このくずが！」

手にしていた剣で龍騎Sを斬るHアポロガイスト。

「ぐあああああああっ！！」

ついに変身が解除された。綾のカブトには対抗する力はない。

「どうすれば……」

Hアポロガイストはゆっくりとカブトに歩み寄る。

「消え去れ！」

「くっ！！」

その剣がカブトを一太刀にしようとしたとき―。

「ぐあっ！！」

何かが剣をはじき飛ばした。それはカブトの手に収まる。

「何かな…？でも、使い方が…分かる」

その装置を腰に取り付ける。

「ハイパーキャストオフ！！」

その装置のホーンを動かした。

『HYPER CAST OFF』

カブトの全身の装甲が展開した。

『THENGЕ HYPER BEETLE』

カブトハイパーフォームへの変身が完了した。（以後Hカブト）

「おのれ：！！」

Hアポロガイストは剣を構えてHカブトへ走り出した。

「ハイパークロックアップ」

そう言うHカブトは腰の装置を軽くだいた。

『HYPER CLOCK UP』

カブトの姿が消えた。否、クロックアップより超高速で動いているからだ。

「さつき、信司君の事をくず呼ばわりしたよね。許さないよ」

信司をくず呼ばわりしたことに綾は怒っていた。恐らく、仮面の中では眩しい笑顔だろう。

『MAXIMUM RIDER POWER』

『ONE TWO THREE』

「ハイパーキック」

『RIDER KICK』

Hカブトの足にほとばしる電流。それをHアポロガイストへぶつけた。

『HYPER CLOCK OVER』

「ふう、終わったっ」

手応えはあった。しかし…。

「ぐ……何とか、直撃は免れた。次はこうはいかんぞ…」

Hアポロガイストはゆっくりと銀色のオーラの向こう側へ消えて

いった。

「にしても、綾は凄いな。怒らせると…」

「何か言ったかな？信司君」

笑顔ではあったが怖い。怖い怖い。

「いいえ…」

「とーりーあーえーず、何か食べに行こっ」

「おう…」

綾に支えられて信司は立ち上がる。二人は食事処に向かった。

第15話「HYPER BEETLE」(後書き)

久しぶりの更新です。疲れました。

【次回予告】

「似合ってるじゃん」

「さあて正解者は…?」

「メリークリスマス!!」

楽しく舞え、少年少女!!

第16話「はちやめちなクリスマス」(前書き)

本編から離れてクリスマスサービス! 変身ライダー変更にてお送りします。戦闘シーンは少なめです。(それぞれ)

第16話「はちゃめちゃんなクリスマス」

雪羅「さあさあみんな！始めるよ！」

一同「何を？」

雪羅「パーティーの！」（叫ぶと同時に指を鳴らす）

幕が上がる。奥には怪人の皆様方。

達也「そういうことか…ってあれ？メダルとドライバーが…」

雪羅「みんなの変身ツールは没収。私の用意したライダーツールで変身してね。まずは達也君！」

手渡すバックル。マークはスピード。

達也「どうやって変身するの？」

雪羅による説明中…。

達也「なるほど！変身！」

『ターンアップ』

オリハルコンエレメントをぐり抜けて仮面ライダーブレイドに変身完了！

「ヴェイッ！」

手にしたブレイラウザーで怪人を斬る。ちなみに斬られているのはショッカーから雪羅の要請（半分脅し）で派遣されたコウモリ男。
「こいつで！」

『キック！サンダー！マッハ！ライティングソニック！』

足に電気がまとわれる。

「ヴェエエエイイイ！！！」

「達也、その叫び声は禁忌…！」

達也はオンドウ…ここから先は言えません。その傍らで爆死した

コウモリ男さん。ご冥福をお祈りいたします。

雪羅「お次は志野！はいどーぞ！」

渡されたツールは赤、青、黄、紫のボタンが付いた金色のベルト。

志野「なるほど、使い方はこうか」

雪羅「流石！飲み込みが早い！」

志野「変身！」

『ストライクフォーム』

仮面ライダーNEW電王に変身完了！

「デディ」

「志野、タイムは？」

「10」

「了解」

目の前のモールイマジンへ斬りかかる。

「10、9、8、7、6…」

カウントは続く。

『フルチャージ』

マチェーデディをモールイマジンの脳天へ振り下ろす。

「3、2。八秒だ。お見事！」

「この位はできて当然だ」

達也「志野、お見事！華麗でかつこよかったぜ！」

志野「そ、そうか／＼これを使うのも、悪くないな…」

雪羅「さて、いちゃついている二人はほっというて、信司君はこれ！」

信司「えーと何々…よし、行くぜ！変身！」

『チェンジキックホッパー』

綾「信司君怖い…」

Kホッパー「お前、今俺のこと笑ったな…」

雪羅「性格豹変！？」

どがああああん！

会場も吹き飛ばした。

綾「これが本当のエンド・オブ・ザ・ワールド」

一同（彼女を怒らせるともつと大変なことになりそう…）

吹き飛んだ会場の残骸。ゾルダの破壊力を思い知ったのであった…。

第16話「はちゃめちゃんなクリスマス」(後書き)

まだMEGA MAXを観ていません。時間が…。

【次回予告】

「こいつ、風都で倒したのに！」

「はははははははははは！！！」

「二気に行くぜ！」

『マキシマムドライブ！』

これできまりだ！

第17話「ALL MAXIMUM DRIVE」(前書き)

進也君中心のお話です。

第17話「ALL MAXIMUM DRIVE」

上野進也。仮面ライダーエターナルに変身する彼は今自宅でくつろいでいた。

「まさか、達也が怪人を倒しまくったからショッカーが怪人切れになるなんて」

3日前…。

「なあ最近怪人あんまり出てこないな」

「ああ、どうも俺が大部隊を全滅させたのが原因らしい…」
その言葉に進也は驚いた。

「良い事じゃないですか。コーヒーが入りましたよ」

コーヒーを持ってきたのは松下里美。仮面ライダーイクサに変身する。

時計は午後2時半を指していた。

「それじゃあそろそろお夕飯の買い出しに行ってきますね」

「あ、俺も行くよ」

そう言って進也と里美は買い出しに出掛けていった。

「重…」

「すいませんね。持ってもらって」

進也は大量の荷物を両脇に抱えていた。

（この重さなら松下さんに持たせるわけにはいかないな…）

「上野君、あれ…」

「ん？」

里美がそう言いながら何かを指さした。

「もしかして…。追ってみよう」

二人は尾行するように歩いていった。

「ふう…まだ見つかってないな…」

「何に見つかってないって？」

そう呟いた男。しかし、進也の尾行に気がついていなかった。

「う、上野進也！」

「見つけたぜ、財団Xの…なんて名前だっけ？」

「うるせえ！！こうなりゃ、お前を始末してやる！」

そう言って男はガイアメモリを取り出してスイッチを押した。

『バスター！』

バスターメモリを手のひらのコネクタに差し込み、バスタードールパントに変身した。

「やっぱお前か。行くぜ！」

『エターナル！』

「変身！」

エターナルメモリをロストドライバーに差し込み、展開した。

『エターナル！』

進也は仮面ライダーエターナルに変身した。

「さあ、お前に罰を与えよう！」

エターナルエッジを構えて走り出す。バスター・Dの砲撃をかいぐぐり、懐にキックをお見舞いする。

「結構強くなったな。でも、負けないよ！」

「そう言ってられるのも今のうちだぜ！」

バスター・Dの姿が徐々に変わっていった。大きく、大きく。

「うおおおおおおお！」

エターナルより遥かに大きい体となったバスター・D。

「喰らえ!!」

バスター・Dの強力な砲撃を何とかかわすエターナル。

「あんまり使いたくなかったけど、使うしかないな」

エターナルは一本のメモリを取り出し、スイッチを押して腰のマキシマムスロットに装填した。

『zone! maximum drive!』

ほかのガイアメモリがエターナルの全身にあるマキシマムスロットに装填された。

『accel!』

『bird!』

『cyclone!』

『dummy!』

『fang!』

『gene!』

『heat!』

『iceage!』

『joker!』

『key!』

『luna!』

『metal!』

『nazca!』

『ocean!』

『papetea!』

『queen!』

『rocket!』

『scull!』

『trigger!』

『unicorn!』

『violence!』

『weather!』

『xtreme!』

『yesterday!』

『maximumdrive!』

A to Zのメモリが集合した。

『eternal! maximumdrive!』

エターナルを緑色のオーラが包む。

「エターナル・ネバーエンド!」

オーラをまとったエターナルエッジでバスター・Dを攻撃した。
爆発して元の男に戻り、バスターメモリはブレイクされた。

「さあ、話を…!」

進也の口が止まった。その男が何者かによって殺されていたからだ。

「いつの間に…!」

財団Xの残党の目的を聞くチャンスを失ったのであった。

第17話「ALL MAXIMUM DRIVE」(後書き)

エターナルのオールマキシマムを登場させました。本作品のオリジナル最強フォームも後々登場させます。

【次回予告】

「逃げろ、志野！」

「達也あ!!!」

「綾…」

「信司君…!!」

「正義の象徴の仮面ライダーはここに滅ぶ！」

「まだ終わりじゃないぜ！」

全てを破壊し、全てをつなげ！

第18話「仮面ライダー」(前書き)

書き忘れてましたがショックカー編は短編です。敵陣営も少ないですの。

どうぞ。

第18話「仮面ライダー」

Counts the medals 現在、オーズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 コンドル×1 バッタ×1 トラ×1
ゴリラ×1 シヤチ×1 ウナギ×1 タコ×2 プテラ
×2 トリケラ×1 ティラノ×2
ショッカー×1

ショッカーが京都の何処かに日本侵略拠点を設置してからすでに二週間。ときおり怪人が出るが、目立った侵攻はなかった。

「志野、ここはどの公式を使うんだ？」

「ああ、ここはこの公式を…」

相変わらず達也は志野に数学を教えて貰っていた。

PULLLLLLLLLL!!!!!!!!!!!!

「電話だ。えーと、士？」

達也は携帯電話の通話ボタンを押した。

「もしもし？ 士、どうした？ ……何！？ わかった、今すぐ行く！」

「達也、どうした？」

「ショッカーが本格的に侵攻を始めた！ 今は海東が戦ってるらしい！ 京都府警に急ぐぞ！」

「わかった！」

【京都府警】

「ふむ、ちょうど良い。ここを作戦本部にするとしよう」

「そうはさせないよ」

「誰だ？」

海東が到着した。

「名前を聞くときは自分から名乗るべきだよ」

「これは失礼をした。我が名はジェネラルシャドウ。ショッカーの幹部だ」

「へえ、ショッカーの割には正々堂々、みたいな感じだね」

海東にとつては意外だった。

「当たり前だ。たとえ敵同士とはいえそれなりのルールがある。さあ、変身しろ」

「言われなくても」

海東はディエンドライバーにディエンドのカードを装填した。

『KAMENRIDE kNAGHT』

「変身！」

『DIEND』

海東は瞬く間に仮面ライダーディエンドに変身した。

「シャドウ剣！」

ジェネラルシャドウは腰のシャドウ剣で斬りかかる。それを紙一重で回避するディエンド。

「騎士には騎士」

『KAMENRIDE kNAGHT』

「はっ！」

ディエンドライバーから仮面ライダーナイトが召喚された。

「ならば私も：はっ！」

ジェネラルシャドウはトランプを使ってもう一人の自分を作り出した。

「はっ！」

ナイトはジェネラルシャドウと激しい剣激戦を繰り広げていた。

「そろそろだな…」

「何がだい？」

「他の幹部も順次到着する。好ましいやり方ではないが…いたしかたあるまい」

その証拠に後ろから斬られるディエンド。

「お前は…アポロガイスト…！」

「ははは！無様だな。かつて私を葬ったライダーがこのざまだ！」

「そこまでだ。ショッカー共」

達也たちが到着した。

「遅い…じゃないか…」

「すまない。後は任せてくれ。いくぞ、志野！」

「ああ！キバット！」

「久しぶりだな！ガブッ！」

「「変身…！」」

『タカ！トラ！バッター！タトバ！タトバタトバ！』

達也はオーズに、志野はキバに変身した。

「紅蓮！」

志野は右手に日本刀「吸血刀・紅蓮」を呼び出した。オーズはメダジャリバーを構える。「いや、ここは…」

オーズはメダルを取り替えてスキャンした。

『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ド〜ル〜！』

「達也、コンドルメダルは奪われたんじゃないか？」

「ああ、昨日道ばたで拾った」

「は！？」

意外すぎた。道ばたでコアメダルを拾うなんて。今はそんなこと

を考えている場合じゃない。

「シャドウ剣！」

オーズを容赦なくシャドウ剣が襲う。負けじとコンドルレッグで反撃する。

「トランプショット！」

ジェネラルシャドウの手から投げられたトランプはオーズの体を引き裂く。

「ぐっ…！くそう！」

「とどめだ！」

渾身の力でジェネラルシャドウはオーズを斬る。

「うわあああああああ！！！！」

変身が解除された。

「達也！」

「よそ見をしている場合か！」

Hアポロガイストに斬られ、これまた変身が解除されてしまった。

「くそっ…！」

「はははは！！他のお前達の仲間も今頃他のショッカー幹部が倒しているだろう！」

「何！？信司…綾！」

「進也と里美も危ないぞ…！」

二人の予感は的中、龍騎、カブト、エターナル、イクサは倒されてしまった。

そして処刑台にキリストのように貼り付けにされる。

「ふふふ…これでこの街から仮面ライダーは抹殺。我々ショッカーの勝は決まったも同然だな」

貼り付けにされながらも達也は海東に話しかける。

「なあ、士は？」

「……………」

海東は黙ったままだ。

「あいつはどうしているんだ？」

「五月蠅いぞ！静粛にしないか！」

「さて、こいつらの処刑は…」

「待てえいいい！！」

「とう！」

誰かがやって来た。

「仮面ライダー一号二号か。お前達が処刑するのか？」

「我々に任せろ！」

「一号二号はショッカーと戦ったが敗北し、洗脳されたらしい…だから、僕たちの敵だ」 一号はゆっくりと達也に歩み寄る。

「名前は？」

一号は達也に名前を聞いた。

「達也。神代達也」

「……待ってろ達也君。今助けてやる！」

「え…？」

一号は自慢のパワーで拘束具を壊した。二号も同様の手順で他の拘束具をはずす。

「貴様等、裏切るのか！？」

「裏切るも何も、元々貴様等の仲間ではないわ！」

「心あるショッカーの科学者が、私たちの洗脳を解いてくれた！」
たじろぐジェネラルシャドウ。その言葉には焦りの色が見える。

「すまない。我々がもう少ししっかりしていればこんな事にはならなかった」

「いえ、あなた方の責任ではないですよ」

一号は没収されたドライバーを達也に渡す。

「ありがとうございます！変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タトバタトバトバ！』

「おのれえ…！」

怪人等が集合する。

「さあ、行くぞ…！」

怪人等とライダーが激突した。

「うおおおおお…！」

龍騎はカードを装填した。

『ADVENT』

「ぐおおおおおおお！」

ドラグレッターが怪人を蹴散らす。

「俺もいるぜ！」

銀色のオーラが現れてそこから他のライダーと共に士が現れた。

「士！」

「待たせて済まなかったな。こいつらを連れてくるのに手間取った」
そこには他の平成ライダーが立っていた。

「変身！」

『KAMENRIDE DECADE』

士はディケイドに変身した。

「見せ場はこれからだ」

ケータツチを取り出す。

『ライジング』

リントの戦士クウガの新たな姿、ライジングアルティメット。

（以後クウガRU）

『シャイニング』

アギトの進化した姿、シャイニング。(以後アギトSh)

『サバイブ』

龍騎の生き残るための力、サバイブ。(以後龍騎S)

『ブラスター』

ファイズの夢を守る力、ブラスター。(以後ファイズB)

『キング』

ブレイドの不死者を束ねる力、キング。(以後ブレイドK)

『アームド』

響鬼の最大の清めの力、アームド。(以後響鬼A)

『ハイパー』

カブトの天を統べる力、ハイパー。(以後カブトH)

『超クライマックス』

電王の最後の力、超^{スーパ}クライマックス。(以後電王SC)

『エンペラー』

キバの鎧の真の姿、エンペラー。(以後キバE)

『ゴールドエクストリーム』

Wの地球の記憶と人々の思いの結晶、ゴールドエクストリーム。

(以後ダブルGX)

『プトティラ』

オーズの守護者としての力、プトティラ。(以後オーズP)

『FINAL KAMEN RIDE DECADE』

ファイナルカメンライドディケイド

「さあ、たかが日本侵略部隊だ。少ないからすぐに決着^{ケリ}が付けれる」
ディケイドは腰に移動したカード装填部分にカードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE ALL RIDERS』

ファイナルアタックライドオールライダーズ

『スピード10! ジャック! クイーン! キング! エース! ロイヤル

ストレートフラッシュ!」

『サイクロン! ヒート! ルナ! ジョーカー! マキシマムドライブ!』
剣を構えたブレイドKが「ロイヤルストレートフラッシュ」、ダブルGXが「ビッカーチャージブレイク」でジェネラルシャドウを斬る。

「うぐう…!」

『カブト・ザビー・ドレイク・サソード・パワー オールゼクター・コンバイン マキシマムハイパーサイクロン!!』

『プトティラーノヒツサーツ!』

カブトHが「マキシマムハイパーサイクロン」、オーズPが「ストレインドウム」でジェネラルシャドウを撃つ。

『FINAL VENT』

「てやあああつ!」

龍騎Sが「ドラゴンハイパーライダーキック」でとどめを指す。

「ぐううう、デルザー軍団、万歳イイイイイイイイイイイ!」

そう言い残してジェネラルシャドウは倒された。

「鬼神、覚醒!」

響鬼Aは「音撃刃鬼神^{おんげきは きしんかくせい}覚声」でHアポロガイストを斬る。

『エクシードチャージ』

ファイズBはソードモードの必殺技「フォトンブレイカー」で斬

りつける。

『ウェイクアップファイバー!』

「はあああっ!!」

キバEはエンペラームーンブレイクでHアポロガイストを蹴る。

「くそお…! 私は、この世で最も迷惑な奴として…蘇ってやる…!」
そう言い残して爆発した。

「はああああ!!」

クウガRUはRUマイティパンチで怪人集団を蹴散らす。

「はっ、たっ、てやあああ!」

アギトShもシャイニングカリバーで怪人を一掃する。

「おのれ、ライダー共…!」

そんな中、死神博士はイカデビルに変身して逃亡を図る。

「逃がさないよ」

そこにはディエンド、イクサB、エターナル、電王SC、Cディ
ケイドが立っていた。

『FULL CHEGE』

「俺達の必殺技、パート…ええい面倒くさい!」

超ボイスターズキックをイカデビルに命中させた。

『イ・ク・サ・カリ・バー・ラ・イ・ズ・アツ・プ』

イクサBはイクサ・ジャッジメントを命中させる。

『ユニコーン! マキシマムドライブ!』

エターナルはユニコーンスパイラルを命中させる。

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE
CADE』

『FINAL ATTACK RIDE DI DI DI
END』

ディエンドとCディケイドは協力して「ツインディメンションシ
ュート」を発射した。

「ゲソー!!!!!!!!!!」

イカデビルは爆発した。だが…。

「おい、あれは…?」

倒した敵の位置からオーラが現れ、一カ所に集まる。

「まだ終わっていないぞ!!!!」

三体の怪人のオーラが合体して新たな怪人が誕生した。

「私はショッカーの最強怪人、レボ!」

レボ、と名乗った怪人は他のライダーを押しつけた。

「ちきしょう、ここまでか…!?!」

「いや、あきらめるのはまだ早いよ、達也君」

ディエンドはオーズタトバコンボに一枚のメダルを渡した。

「これは…?」

「イマジンメダル。その電王から貰ってきた」

後ろを見ると体に手を突っ込まれて後で錯乱する電王SCがいた。

「ショッカーメダルと組み合わせる使うんだ」

「あれと…?」

新しいコンボが誕生しようとしていた。

第18話「仮面ライダー」（後書き）

次回でショッカー編は終了です。次は何にしようかな…。

【次回予告】

「ライダーダブルキック!!」

「俺達は、悪が滅ぶまで死なん!!」

「俺が、この街を守るライダーとして、こいつを倒します!」

『タカ! イマジン! ショッカー!』

魂を揺さぶれ! 仮面ライダー!

第19話「炸裂魂」(前書き)

この話でショッカー編は終了です。最後ですのでかなり短いです。
(これ以上長くしたらぐだぐだになった)

第19話「炸裂魂」

Counts the medals 現在、オ
ーズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 コンドル×1 バッタ×1 ト
ラ×1 ゴリラ×1

シャチ×1 ウナギ×1 タコ×2 プテラ×2 トリケラ
×1 ティラノ×2 イマジン×1
シヨツカー×1

「我々が相手だ！レボ！」

「面白い。かかってこい」

仮面ライダー一号二号は同時にジャンプをした。

「「ライダーダブルキック！！」」

必殺技のライダーダブルキックを命中させた。しかし…。

「ふん！この程度か！！！！！！」

足を捕まれて投げ飛ばされた両者。そこへ…。

「ここは俺に任せてください」

「達也君…。分かった。無理は禁物だ」

オーズはトラ・バッタのメダルを抜き取り、二つのメダルを装填
してスキャンした。

『タカ！イマジン！シヨツカー！ターマーシー！タマシータマシー
！ライダー魂！！』

オーズタマシーコンボに変身した。肩の角が特徴的だ。

「予想通り。僕の勘は当たるねえ」

「魂だか何だか知らないが、私の敵ではない！！！！」

レボは手からエネルギー弾を発射した。しかし、命中しても効果

が無い。

「何だと!!」

『スキヤニングチャージ!!』

オーズが両手を構える。そこにはショットカーメダルの模様が見えるエネルギー弾が形成された。

「てやあああああ!」

それをレボに向けて発射する。

「これでトドメだあ!!!!」

タカメダルの模様とイマジンメダルの模様のエネルギー弾を発射する。それは左右からレボを襲う。

「ぐうううう!!!! ショッカー……大万歳イイイイイイイイイ!!
!!!!!!」

レボの断末魔が聞こえた。レボは倒され、ショットカー日本侵略部隊は壊滅した。

「もう、行くのか?」

「ああ。俺達は他の世界も旅しないといけないからな」

今日は土の出発する日。次の世界に行くらしい。何でもロケットやら宇宙やら。

「このメダル、お前達と戦った絆の証として大切にするよ」

「よせよ」

「なあ志野」

「どうした?」

達也は少し恥ずかしそうに喋る。

「夏休み、まだあるから二人だけでどっか行こうぜ……」
それはデートの誘いでもあった。

「ななな何!?!?…そうか、そうかそうか!仕方ないな、行ってや

ろう。お前だけだぞ！」

「分かってるよ」

帰り道志野は終始ご機嫌だった。

(ふふっ！達也とデートか…！ふふふ…！！！)

第19話「炸裂魂」（後書き）

ちょっと短すぎましたかね？ 今後は事前に短編かどうかを付け加えておきます。

次回からは私が独自に考えたオリジナルシリーズです。

【次回予告】

「似合ってる。可愛いじゃんか」

「京都きょうとに来てくれて、ありがとう」

「あやつがいつ開くか分からないのですぞ!!」

「志野!! 何で、こんな事を…!!」

京都に蔓延る謎に立ち向かえ、オーズ!

第20話「放たれた刺客」(前書き)

オリジナルシリーズに突入です。

第20話「放たれた刺客」

counts the Medals 現在、オーズの使えるメダルは…？

タカ×1クジャク×1コンドル×1バッタ×1トラ×1ゴリラ×1シャチ×1

ウナギ×1タコ×2プテラ×2トリケラ×1ティラノ×2イマジ
ン×1ショッカー×1

「ねえ達也君、ちょっと良いかしら？」

「あ、良いですよ」

欄香に呼ばれて達也は返事をした。

「お願いなんだけどさ、志野ちゃんを今日の祭りに誘ってあげてくれないかしら？」

「え？」

「ほら、あの子ったら恥ずかしがり屋でしょ」
言われてみればそうだ。

「それじゃ、お願いね」

俺はとりあえず志野の部屋へ向かった。

「志野、入って良いか？」

「達也か。良いぞ」

OKが出たのでドアを開けた。落ち着きのある部屋だ。

「どうした？また数学を教えて欲しいのか？」

「いや、違う。その…、今日の祭り、一緒に行かないか？」

達也は少し照れながら言った。今まで自分から女の子を祭りとかに誘ったことはない。ましてや相手は意中、しかも両思いの志野だ。

「わ、私で良いのか？」

「当たり前だ」

志野の表情が明るくなる。脳内ではキバットらと祝杯をあげている。

「そうか、良いだろう！で、いつから行くんだ？」

「そうだな：開始時間が五時半だから：六時頃に行こうぜ」

「分かった。忘れるなよ！」

達也は部屋を出て行った。

（達也が、私を：誘ってくれた：ふふふ！！）

心の中で微笑む志野。

そして…。

「志野ちゃん、準備、出来た？」

「はい、万事問題ありません」

志野は紅の浴衣を身に纏っていた。

「では、いってきます」

そう言って玄関を出て行った。

「待たせたな、では行くでしょう」

「お、おう」

二人は祭りの会場に向かって歩いていった。

「なあ志野、その浴衣…」

「？」

「似合ってる。可愛いじゃん」

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

顔がボツと浴衣に負けないくらい赤く染まった。

「そ、そうか：／／／／／」

そんなこんなで会場に到着した。屋台や名物の相撲大会で大にぎわいだ。

「にしても、凄いな…」

「ああ。ここの祭りは規模が大きいからな」

志野は一つの屋台に目がとまった。それは射的屋だ。

「やりたいのか？」

「う、うむ」

二人は屋台に近づいた。

「二人分お願いします」

「あいよ！んじゃ600円！」

達也は代金を払い、コルク弾が込められた銃を受け取る。装填数は4発。

「どれに：よし。あれにしよう」

達也は腕時計に狙いを絞った。

（あの角度、形状なら：）

身長に狙いを定める。

「ここだ！！」

一点に集中して4発を当てる。側の景品も纏めて倒れ、一気に四つも獲得した。

「兄ちゃんお見事！」

周囲から歓声が上がった。

「志野、調子は：？」

「ううう：」

どうやら一発も当たってないらしい。

「何を狙ってるんだ？」

「あれだ：」

志野が指さしたのは熊のぬいぐるみだった。女の子らしいな。

「弾は残り何発？」

「一つだ：」

ちなみに撃った弾はまっすぐ行かずに地面にめり込んだり、木の板を少しなかり破壊したりと大変な方向に飛んでいていた。

「よし、俺が教えてやる。ちょっと失礼：」

「ひゃあっ！？」

達也が息の掛かる距離まで近づいてきた。

「ここをこうして：」

説明は頭に入っていない。

（う：達也がここまで近づいて：／／／）

「よし、志野。撃て！」

「お、おう」

我に返り、引き金を引いた。弾はまっすぐぬいぐるみの額に命中し、ぬいぐるみを倒した。

「お嬢ちゃんやるね！」

志野はぬいぐるみを片手満面の笑みだ。

「さあ達也！次はどうする？」

「んゝ少し休むか」

そう言って近くのベンチに腰を下ろした。

「へへっ…。ふふふ…」

終始ご満悦の様子だ。

「達也」

志野が顔を近づけてきた。月明かりに照らされて綺麗だ。

「な、何だ？」

志野は表情を崩すことなく続ける。

「京都（きょうと）に来てくれて、ありがとう」

その言葉は達也の心に直撃した。

「俺も、お前と会えて、嬉しかった」

「過去形にするな。今も嬉しい、だろ？」

「ああ！」

二人は何も言わずに顔を近づけ、そっとキスをした。

「ただいま戻りました」

二人は家に到着した。志野は浴衣のまま自室に戻った。

「達也、達也…」

志野は眠りにつくまで達也の名を呟き続けた。

翌日…。

「ん？この扉…なんだ？」

達也は家の中で見慣れない扉を見つけた。

「話し声…？」

達也はそつと扉に耳を当てて話を聞いた。

「筆頭、いつまで監視を続けるおつもりなのですか？ 筆頭のお気持ちも十分理解できますが…」

中年男性の声が聞こえた。筆頭？ 監視？ いったい何なんだ？

「もう少し、もう少しだけ…」

志野の声だ。筆頭って呼ばれてるのか？

「あやつ、神代達也がいつ開くか分からないのですぞ！」

！？ 俺の…名前？

「早々に始末しないと…」

がたっ！ 思わず手に持っていた携帯電話を落としてしまった。

「誰だ！？」

俺は一目散に逃げ出した。

しばらく走っていると後ろから追っ手が来た。ここからでも分かる。手にしてるのは鎌や小さい斧。そして包丁。間違いない。俺は捕まったら殺される。

「何なんだよ、お前達は！！」

『タカ！トラ！バッタ！タトバ！タトバタトバ！』

身を守るべくオーズに変身した。本気で叩くわけにも行かず、力をセーブして戦った。

「殺せ！」

やっぱり。刃物類は脅しではなく本気で俺を殺す気だ。

「ぐあっ！」

後ろから斬られた。こいつらの持つ刃物ではオーズに傷つけることは出来ない。ライダーか怪人だ。後ろを振り向くと一番ありえない奴が立っていた。

「キバ…？もしかして、志野か…？」

「ああ。私だ」

この声は志野だ。いつも俺に話しかける声とは違い、冷たく、そして蔑まれているかの様な声だった。

「志野…！何でこんな事を…！」

「私の役割、京都五色ノ頭の筆頭（きょうごしつごのうづし）である私の役割だ」
京都五色ノ頭！？いったい何なんだ！？

「消えてもらう」

「くっ…！！」

ガキーン！！キバが手にしていた吸血刀・紅蓮はオーズを斬るところとなく防がれていた。「…！？」

「おおっと、この子はやらせないよ！」

ライダーが乱入した。見た目は虫っぽい…。紫色だな…。

「貴方は？」

「俺は仮面ライダークウガ。ここは俺に任せて、逃げるんだ！」

突然俺の危機を救ったのは仮面ライダークウガと名乗った。そういえば士達が来たときにもクウガに変身する人がいたな…。

「小野寺…ユウスケ？」

「は？誰だよそれ？とにかく逃げろ！」

タイタンソードで紅蓮の攻撃を防ぐクウガT。

「すみません！ここはお任せします！」

『シャチ！ウナギ！タコ！シャツシャツシャウタ！シャツシャツシヤウタ！』

シャウタコンボに変身し、近くの川に飛び込んだ。シャウタコンボは水の中では透明になれ、発見されにくい。

「超変身！」

近くに置いてあった鉄パイプを手に取り、クウガTはそう叫んだ。体の色は青に変わり、手にしていた鉄パイプはドラゴンロードと呼ばれる名称に変わり、クウガドラゴンフォームに変身した。

「じゃあな！」

ロッドを使って大きくジャンプし、どこかへ逃げていった。

「申し訳ありません！」

「今はいい。とりあえず戻るぞ。」

「はっ！」

キバの命令で達也を襲った刺客は帰って行った。

一人変身を解除して佇む志野。

「達也……」

その声は震えていた。

第20話「放たれた刺客」(後書き)

この話のゲストライダーはクウガが妥当と考えました

【次回予告】

「そんな…嘘だ！」

「達也君…」

「これが、現実だ」

京都に蔓延る謎は何を語る？

第21話「京都に蔓延る謎」 (前書き)

志野と別れた達也。はたしてどうなる？最新話です。どうぞ。

第21話「京都に蔓延る謎」

達也はとある家の前に立っていた。篠原家。つまり綾の家だ。薄れゆく意識の中でインターホンを押す。

「はい、って達也君！？大丈夫！？」

「中に…入…らせ…て…く…れ…」

そう言って達也は気絶した。背中から血があふれている。先程キバに斬られた際に出来た傷だろう。

「とにかく中に…」

「俺も手伝おう」

そこに立っていた一人の青年。悪い印象はないが好青年のイメージも無い。

「貴方は…？」

「彼がそうなった事情を知っている者だ。とにかく中へ！」
その青年と綾は客間に達也を運んだ。

「う……」

三十分後、達也は目を覚ました。

「達也君、大丈夫？」

「綾…？」

客間で目を覚ました。

「綾、この人は…？」

「達也君を運んでくれたの」

達也はとりあえずお礼を言った。

「俺の名前は坂井良一郎。さかいりょういちろう仮面ライダークウガだ」

「クウガ…。と言うことはさっきの…」

「ああ」

二人の会話が続く中、綾は紅茶を運んできた。
「どうぞ…」

「ああ、どうも」

良一郎は紅茶を一口飲む。

「さて、本題に移ろう。達也君、君を狙ったあの集団についてだ」
達也を襲った集団。般若のお面をかぶり、白装束でまとまったあの集団。

「彼らは、京都五色ノ頭という。それらはさかのぼること平安時代中期に設立された。その組織を束ねる筆頭の役目は、如月家が務めてきた」

「つまり、志野はその組織の筆頭…」

達也はなんとか理解していた。

「奴らの目的は、京都の平和」

「でも達也君は京都を守るために今日まで戦ってきたんですよ！」
綾は反論した。それもそのはず。

「彼らもその事に関しては感謝している。だが、奴らが狙う理由はそんな事じゃ消えない」

「どういう…事…ですか？」

良一郎は紅茶をまた一口飲み、話を続けた。

「唐突だが、君の体にはコアメダルとは別にとある者が宿っている。それは神だ」

「神様…？」

「そうだな。ちなみに君の体には…少し待ってくれ」

俊一郎は目を閉じた。しばらくして目を開ける。

「宿っているのは伊邪那岐だ」

「伊邪那岐…？あの日本神話に出てくる…」

達也の体に伊邪那岐が宿っているらしい。

「奴らは、体に神を宿す者が京都にいた場合、抹殺するのが目的だ。彼らは君のような人を宿人やどりびとと呼んでいる」

「でも、それだけが狙う理由に…？」

「それだけではない。体内の神はある条件を満たすと宿主を乗っ取り、破壊活動を行う。宿った神に関係なく、同じ行動が行われる。」

それを開く、と言う」

開く。扉の近くで聞いたあの言葉。

「それが理由、だ。家では気をつける。俺は宿人だ、の理由で人を殺す奴らが嫌いだ。お前は俺が守る」

「家は…志野の家に居候しているんです…」

良一郎は少し驚く。そして少し考え…。

「では、誰か知り合いの家に泊めてもらえ」

「達也君、僕の家で良ければ落ち着くまで止まってもらっても良いよ」

綾が許可を出してくれた。しかし…。

「荷物とかはどうすれば…」

「こんな事もあるうかと、こっそり俺のクウガに変身したときの心強い味方、ゴウラムに運ばせた」

良一郎は体の後ろから荷物一式を差し出した。

「あの部屋にはお前の私物は一切残っていない。におい、とかで発見される可能性も低いだろう」

「ありがとうございます…。綾、今日からしばらくよろしくな」

「うん、良いよ」

良一郎はゆっくり立ち上がる。

「それじゃ俺は帰る。紅茶、ご馳走様。何かあったら連絡してくれ」

そう言って良一郎は連絡先のかかれたメモを手渡して帰って行った。

「信司君にも連絡しておくね…。進也君と、里美にも…」

「ああ…頼む」

京都の少年少女を巻き込んで新たな戦いが始まろうとしていた…。

第21話「京都に蔓延る謎」(後書き)

今年最後の更新です。皆様良いお年を。

【次回予告】

「本編を離れて新春パーティー！」

「はあ…またやっちゃった…」

良いお年を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3169y/>

仮面ライダーオーズ 街を守る王の戦士

2011年12月31日18時49分発行